ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉 ～竜の力の持ち主～

八神刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　～竜の力の持ち主～

【Ｎコード】
Ｎ３００４Ｑ

【作者名】
八神刹那

【あらすじ】
弟に世界を託した青年はＩＳの世界へ。彼は世界を漆黒の闇へ誘う男を倒せるのか？

プロローグ

ある1人の青年が死んだ。
己を超える弟に未来を託して。

「ある世界を救って」

青年の耳に女の人の声がした。
なぜオレなんだ・・・

「貴方が“竜の力”を持っているから・・・貴方はやり直さなければならない」
オレは・・・死んだ身だ。そのオレに何ができる?

「貴方はあの男を倒さなければならない・・・世界を漆黒の闇へ誘うあの男を・・・
・・・・・を」

名前が聞こえないが彼には理解できた。その男の名が

青年はある世界へと旅立った。

彼の名は　宮田　信次。
かつて最強と呼ばれた戦士だ。

第1話　接触

「ん・・ン・・・」
少年は変な夢を見て目が醒めた。
「・・・・・死んだはず。なんだけどねぇ」
彼の名は宮田　信次。かつて、十三隊と呼ばれる場所にいた男だ。
「・・・世界を救え。ねぇ～」
周りを見渡す。病室。そして、自分の知らない世界。
「・・・はぁ。マジで違う世界。しかも見た目は１５、６歳」
などと考えていると
「気がついたようだな」
スーツを来た女性が入って来た。手には彼の愛刀　王刀“叢雲牙”を持っている。
「意識は覚醒しているか？聞きたいコトがある」
「大丈夫だ。オレも知りたいコトがある」
「名前は？」
「宮田　信次」
「何者だ？」
「何者だって言われてもなぁ・・・オレも気づいたらここにいたんだし。とりあえずわかってるのはここはオレのいた世界じゃないってコト」
「オレのいた世界じゃない？どういう意味だ？」
「オレは元は死んだ身だ・・・で、さっきの夢の中に変な女にあって『この世界を救って』くれって頼まれた」
その言葉に織斑は怖い目で信次を見ている。
「その女とは？」
「知らない。でも、ある男の名前を知っていた。だから、信じられる」
「そうか・・・では、お前の操縦していたＩＳはなんだ？」

「ＩＳ？」
信次は首を傾げる。
「そうか、違う世界から来たから知らないのか・・・」
それから信次はＩＳとこの世界のコトについて簡単だが話を聞いた。
そして、己の愛刀“叢雲牙”がそのＩＳの待機状態であるコトも
「なるほどねぇ・・で？オレはどうなる？女しか使えないＩＳに乗っていたオレは」
「とりあえずはこの学園に編入することになるだろう。手続きはこちらでやっておく」
「それはありがたい。で？アンタの名前は？」
「織斑　千冬だ。この学園では織斑先生と呼んでもらう」
「わかった」
「２日後にＩＳ学園に編入してもらう。明日は市内にでも行って必要なモノを揃えるといい」
そう言って織斑先生は病室から出ていった。
「・・・さて。しばらくは暇になりそうだな」
信次は窓の外を見ていた。時刻は夕方。
「イスファル・・・」
探している男の名前を言う。それは彼が封印した男。
これが宮田信次の新たな道のスタートである。

第1話　接触（後書き）

主人公紹介。

名前：宮田　信次

年齢：本当は２４歳。現在は１５歳。

容姿：身長１７５？　体重６３？。赤黒い髪が特徴。右目に縦のキズがついている。

性格：かなりの馬鹿。だが、優しく面倒見の良い性格。

ＩＳ：黒龍。武器は叢雲牙

第2話　買い物と実力

翌日。午前１０時。
信次は織斑先生から軍資金を貰い街へ出た。ちなみに軍資金は国営である学園から貰ったモノ。
「国営とはいえちょっと気が引けるな」
そう言いながら信次は電車を乗り継ぎ市街地へ向かった。

信次はまず服を買っていた。
（４月だし・・・パーカーとスウェット・・・Ｔシャツ）
あまり派手じゃない白や黒を中心とした服を選んでいく。
（こんなもんか・・・）
会計を済ませる。軍資金は１５万円。
（本でも買うか）
信次はデパート内の本屋に立ち寄った。まずこの世界の情報を得る（ＩＳ・・・正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ・・・。だが、制作者の意図とは違い“兵器”として変わり、現在はスポーツとして使われている・・・
オレの世界の魔石と同じか・・・
で、ＩＳは男には使えない・・・。分かるのはこれぐらいか・・・）
信次は有名な作家の本数冊とマンガ、雑誌を買い近くのテラスで昼食を取ることにした。

テラスで頼んだのはハンバーガーのセットにホットドック。精神は２４歳と言っても身体は１５歳。腹は減る。ホットドックをほうば

りながらさっき買ったＩＳ関係の雑誌を見ていた。
（・・・ＩＳの軍事利用は『アラスカ条約』で禁止。ＩＳは世界で４６７機しかない。制作者はそれ以上作ろうとしない・・・。１０年間で世界の軍事バランスは崩れ、現行の戦闘兵器はただの鉄クズ・・・。洒落にならんな・・・。で、制作者の篠ノ之　束は行方不明・・・。他には・・・）
考えながらページをめくる。欲しい情報の資料がないため雑誌を仕舞う。
（オレのＩＳは“黒龍”。接近戦主体のＩＳ。武器は叢雲牙のみ・・・。黒龍破、龍天月破とかは撃てるらしいがこの世界には魔力素がない。自分の魔力でやるしかないか・・・）
昨日見た黒龍のデータを思い出す。彼は経験値なら負けない自信はあるがこの世界のコトはからっきしだ。
（まずそこをなんとかしねぇとな・・・）
などと考えながら昼食を食べていた。ちなみに黒龍の待機状態は刀のようなペンダントになっている。

昼食を終え日用品を買う信次。
（歯ブラシ、タオル、それから・・・）
必要な物を買い外へ出る。

（この世界は女尊男卑。それはアソコと変わらんか・・・）
信次の考えているアソコとは彼がいた組織のコトだ。そこは確かに男は強いが何故か女の方が権力、発言権が強いのだ。そこに１０年近くいたため、この世界の情勢に対応はできるらしい。

買い物を終えＩＳ学園に帰ると織斑先生が待ち構えていた。

「買い物は終わったようだな」
「とりあえず当面はなんとかなる」
「これから付き合ってもらうぞ。お前とお前のＩＳの実力を知りたい」
織斑先生の言うことに信次は黙って従った。

第３アリーナ。
広いアリーナに信次は１人ポツンと立っていた。
〈聞こえるな？これからテストを行う。宮田。ＩＳを起動させろ〉
織斑先生から通信が入る。
「コイッ！黒龍！」
念じると黒色の機体が信次の身体を覆った。昔着ていた布の鎧ではなくガッチリした鎧。その姿はまだ卵から還ったばかりの雛竜のようだ。
〈今、お前のＩＳは最適化処理を行っている。それはお前の意思で動く。まず、空を飛んでみろ〉
（となると感覚・・・いつも自分が黒い流星になるように・・・）
元の世界での感覚を思い出す。すると体が宙に浮く感覚がした。
（飛べる・・・！）
空を飛ぶ感覚。前の世界と同じ。自分が風を切り裂いて自分が風になるような感覚。速度を上げれば流星になるような感覚。
〈飛んだ感想はどうだ？〉
「悪くない。懐かしくて風が気持ちいい・・・」
信次はアリーナを飛び出しアクロバティックな動きをする。黒龍は信次の思うがままに動く。
〈宮田！戻って来い。これからターゲットを出す。それを全部壊せ〉
アリーナに戻ると１０個の風船みたいなターゲットがあった。
信次は王刀“叢雲牙”を構える。長い日本刀に見える大刀。柄まで入れたら１５０？はある刀。常人なら扱うのは不可能だろう。

「うしっ！いくぜ！！」
スラスターを吹かせターゲットとの距離を一気に詰める。
「オラァ！」
見事な袈裟斬りでターゲットが爆散する。その瞬間空気を蹴るように後ろに飛び２つ目のターゲットを破壊する。

信次の戦闘を管制室で見ている織斑先生と山田　真耶先生。
「彼すごいですね・・・あんな動き代表候補生でもそうはできませんよ」
山田先生が驚く。
「・・・近接戦闘に特化しているな。あの剣の動きからして防御もかなりのモノだろう。そして、宮田は戦い慣れている。そうでなくてはああは動けん」
織斑は冷静に信次を分析していた。

「後２個！」
開始から１５分。普段よりかなり遅いが信次はＩＳに体を馴らしていた。
（龍天月破・・・。やってみっか！）
信次は叢雲牙を上段構えにする。叢雲牙にエネルギーが集まる。黒いエネルギーだ。
「龍　天　月破！！」
それを思い切っり振る。集まっていたエネルギーの放たれる。三日月の形をした刃がターゲットを切り裂いた。
「もう一丁！！」
刀の野球のフルスイングよろしくみたいに横薙に振る。また龍天月破が放たれる。
龍天月破。信次が開発した刀による中距離攻撃。己の魔力、気を練

り上げ刀に集中させるコトにより放つ技。その威力は岩石程度なら切り裂くコトができる。

「龍天月破が撃てるなら黒龍破、瀑龍破も撃てるな・・・こっちのカードは揃った」

〈終了だ。戻って来い〉

織斑先生から通信が入りアリーナに着地し黒龍を待機状態のペンダントに戻す。

「ふう・・・」

「ご苦労。明日からＩＳ学園に編入してもらう。準備を忘れるなよ」

そう言って織斑先生はアリーナを後にしていた。

（・・・ファースト・シフトなしでこの性能・・・宮田信次。あいつは何者なのだ・・・）

信次の戦闘能力の異常に疑問を抱く織斑千冬だった。

信次はシャワーを浴び、仮の自分の部屋に戻った。

「・・・こっちは出るに出られない。なら、向こうからの接触に賭けるか」

ベッドに寝転がり今後の予定を考えている信次。

「学校か・・・やり直せるなら良いか・・・こっちはとりあえず平和なんだし・・・」

信次は明日から始まる学校生活に期待していた。

？？？。

「あいつか・・・竜の末裔・・・・・・ククククク。ハハハハハハ！」

闇の中ある男の笑い声が響いていた。

第3話　編入

信次は夢を見ていた。ある女性とあった夢を・・・。
彼が２０~２２歳の時に一緒にいた女性との思い出を・・・

ハッと目が覚める。変な寝汗が服を濡らしていた。時計を見る。時刻は６時半。少し起きるのが早い。
「なんでいまさら・・・
ルーシャ・・・」
女性の名を呟き。窓を眺めていた。

「宮田　信次です。よろしくお願いします」
１年１組の教室で挨拶をする信次。クラスの９割、いや、１人の例外を除いて女子しかいない。
（女しか使えないから想像はしていたが・・・まるでウーパールーパーだな・・・）
クラスの女子が信次に視線を送る。
（・・・視線がすごい・・・）
正直な感想を思う信次。「宮田くんは事情がありこの学園に編入するコトになりました。皆さん仲良くして下さいね」
副坦の山田先生が言う。
（・・・よかった。男がいてくれて）
信次は安堵していた。
「宮田くんの席はアソコです」

山田先生が指差す。
「ハイ」
返事をしてその席に着く。
「隣の藤堂　咲耶よ。よろしく」
隣には信次の知っている人物がいた。
「・・・・・・」
信次の頭が完全にフリーズした。
（ちょっと待て！なんでコイツがいるんだ！？この悪魔がなんでいる！？）
信次は必死に考えていた。
「どうしたの？」
良い笑顔の咲耶。だが信次には悪魔の笑顔に見えていた。その目は
『騒いだら殺す♪』
と言っている。
（オレ・・・死んだな）
そう思わずにはいられない信次であった。

休み時間。
「久しぶりね～・・・もう何年ぶりかなぁ？」
咲耶に質問攻めにあっている信次。
「その話はまた後でな」
咲耶にしか伝わらない簡単な手話を送る。
「わかった」
咲耶はその手話を理解ここは退くことにした。
「ちょっといいか？」
信次の前にこの学園唯一の男子がいた。
「俺は織斑　一夏。男同士仲良くしようぜ」
「ああ。宮田信次だ。よろしくな。あと、名前で呼んでくれ」

「こっちもな」
（仲間でいてくれて助かった・・・）
信次は安堵していた。
「私はセシリア・オルコット。よろしくお願いしますわ」
金髪の少女が。
「篠ノ之　箒だ。よろしく頼む」
ツリ目でポニーテールの少女がそれぞれ自己紹介する。
「信次って専用機持ってんの？」
咲耶が聞く。
「持ってるぞ。これ」
そう言って信次は待機状態の黒龍のペンダントを見せる。
「黒龍って言うんだ。近接戦闘型だ」
「俺と同じだ。武器はなんだ？」

それから信次は質問攻めにあったがなぜかスラスラと答えていた。

午後の授業はＩＳを使った訓練。
（学園なのに訓練・・・。ちょっとおかしいかな？）
鬼教官の話をほとんど聞かないで信次は上の空だった。
「と言うわけで。宮田！藤堂！お前達に模擬戦してもらう」
織斑先生の言葉で現実に戻される信次。
（ちょっと待て！あいつと！？あの悪魔と！？）
信次は咲耶を見る。悪魔の笑顔でこちらを見ている。それは
『断ったら殺す♪』
と言っている。
（腹括るしかないか・・・オレってついてねぇ）
と思いながら織斑先生の指示に従い準備を始めた。

「黒龍！」
信次のＩＳが展開される。黒い雛竜の姿だ。
「アルケー！」
咲耶のＩＳが展開される。朱い機体で手足が少しばかり長い。手にはすでに大型の銃が握られている。
データが表示される
（・・・日本の代表候補生　藤堂咲耶のＩＳ“アルケー”・・・接近戦に特化した機体。あいつらしいな）
そう思いながら叢雲牙を構える。
「本気で潰したあげる」
かなりおっかない声。彼女は戦闘になると性格が一変する。しかもかなりの危険人物に

「それでは・・始め！！」
織斑先生の合図で模擬戦が始まった。
竜　対　悪魔
の試合が

第４話　模擬戦

信次の目の前にいるのはかつての敵であり仲間の藤堂咲耶。ＩＳ“アルケー”を纏っている。

（アルケーの武器は・・炎刀“緋燕”。ガンブレイドか・・・それと接近戦用の大剣“バスターソード”が２本・・・）

相手のスペックを確認し叢雲牙を構える。

「じゃあ・・・始めるか！！」

「ギタギタにして上げる！！」

信次が間合いを詰め斬り掛かる。咲耶は避け右から横薙をいれる。

「よっ！」

信次がそれを叢雲牙で防ぐ。

（防御用のエネルギーが切れたら負け・・・なら剣で防ぐか避けるしかない）

距離を取り様子を伺おうとしたが

「甘い！！」

咲耶が緋燕のトリガーを引く。銃口からエネルギー弾が発射される。しかも速度はないが連射が可能のようだ。

「うおっ！！」

信次が避ける。

「ハアアア！！」

咲耶がすでに間合いを詰めていた。

炎刀“緋燕”は連射速度は遅いがその間に間合いを詰められるという利点がある。おまけに咲耶は接近戦も中距離戦も得意なためかなり厄介だ。

信次は距離を取る最中
「龍天月破！！」
を放つが半身でエネルギーも充電されてないまま放っては威力は５分の１にも満たない。
そもそも龍天月破は一撃必殺の技だ。万全の状態で打ってこそ真の力が発揮できる。
咲耶に簡単に避けられる。
「ハハハハハハ！！」
咲耶は笑いながら信次に斬り掛かる。彼女は戦闘になると本気で殺しに来るかなり危険人物。
信次は冷静にそれを防いでいる。

「すげぇ・・・」
一夏は２人の攻防を見て呟いた。
「咲耶さんは接近・中距離に対応した武装ですね。逆に信次さんは一夏さんと同じ近接戦闘に特化した武装・・・。これでは咲耶さんが圧倒的・・・」
セシリアが解説している。
「だが、圧倒的に信次の方が不利なのにあいつは全ての攻撃を避けたり、防御している・・・」
箒は冷静に試合を見ていた。

「避けるね！でもこれでおしまい！！」

咲耶が距離を取り緋燕にエネルギーは集中している。
「もらった!!」
その間に信次が間合いを詰めるが
「甘い!!」
空いている左にバスターソードがマウントされる。
「くっ!」
斬り掛かるバスターソードを防ぐが吹っ飛ばされる。
「ホントにおしまい!!」
チャージを終えた緋燕のトリガーを引く。そしてエネルギー弾が連射される。
(捌き切れねぇ!!)
正面のほぼ全角度から襲い掛かるエネルギー弾。
直撃。

「勝った!」
咲耶はそう確信した。十八番で決めたんだ勝ちは決まっている。
だが、
『警告敵機攻撃状態』
「え?」
その瞬間咲耶の横を黒いエネルギー弾が通り抜けた。
「これって・・・龍天月破!?まさか・・・!?」
煙りが晴れ敵のISが見える。それは黒龍。だが、翼がある。先程までの雛竜の姿ではなく本物の竜のような姿。
『初級者』『最適化』かが終了と書いてあった。
「まさか!?一次移行!?じゃあ・・・今まで初期設定だけで戦っていたの!?」
目の前にいる1人の竜。
「やっと戦れる!さて・・・そろそろ仕舞いにするか!!」
信次がいきなりスラスターを吹かせる。その速度は先程とは桁が違う。

「速い！？」
咲耶は緋燕を連射し牽制するが信次はそれを全てたたき落とす。
「ハアアア！！」
斬撃がヒットする。
「こうなったら！！」
咲耶はバスターソードをマウントさせる。これで純粋な接近戦。
ガキン！　キン！
剣が重なり合う音が響き渡る。
黒龍のスペックはアルケーのスペックを圧倒している。若干だが咲耶は信次の動きについていけてない。
咲耶は距離を取る。
（来い・・・来い・・・！）
咲耶の考えてた通り信次が接近して来る。
「ここ！」
チャージが終わっている緋燕のトリガーを引きエネルギー弾を連射する。
「！？」
また直撃。だが・・・煙りが晴れ見えたのは黒龍の翼で身を守った信次の姿。
咲耶の元にデータが届く。
「“絶対防御翼”・・・？ダメージを半減させる！？」
「悪いが・・・ゲームオーバーだ！」
叢雲牙にエネルギーが集中する。一気に間合いを詰め咲耶を叩き斬る。そして、上段構えにする。
「龍　天　月破！！」
黒い斬撃が放たれる。咲耶に直撃。バリアーのエネルギーが一気にゼロになる。
『勝者　宮田信次』
アリーナ内に響き渡った。

模擬戦を終えた信次を待っていたのはクラス全員による質問攻め。
とりあえず信次は自分のわかる範囲で答える。

昼食時。信次は一夏、箒、セシリア、咲耶の４人と食べていた。
「なるほど。信次のＩＳは高速戦闘と近接戦闘に特化した機体か」
一夏は信次の説明を簡単に繰り返す。
「絶対防御翼・・・。相手の攻撃を半減させるとは」
「ちょっと反則ではないですか？」
箒、セシリアと続く。
「おまけに龍天月破まで撃っちゃうってねぇ」
咲耶が言う。
「でもまだ何かあるらしい・・・黒龍にブラックボックスはかなりあるらしいからな」
そんなこんなで昼食を終え午後の授業に臨む。だが信次はたいていの科目はわかっているので聞かないでいたら織斑先生にありがたい出席簿アタックを数発食らった。

「１０３９室。ここか」
信次は部屋の番号が書かれている紙を見る。ＩＳ学園は全寮制。しかも男は２人。イロイロ大変なのである。
信次がドアを開けるとそこには
「ヤッホー」
悪魔がいた。
（オレ死んだな・・・）
そう思わずにはいられない信次であった。

その後。信次はこの世界に来た経緯を咲耶に説明し眠りに着いた。

信次が寝ている頃。中東の紛争地域。
そこは火事になっていた。１人の男のＩＳによってあるのは屍だけ。
しかも敵味方関係なし。
その屍の上に１人の男が
「やっぱ・・・人は死ぬためにいる・・クックックッ・・・ハハハハハハ！ハーハッハッハッハ！！」
そこには漆黒のＩＳに身を包んだ男の笑い声しか聞こえなかった。

第４話　模擬戦（後書き）

人物紹介

名前：宮田　信次

機体：黒龍

性格：飄々としている性格だが、やる時はしっかりやる性格。元の世界では十三隊十番隊隊長だった。昼寝が好き。つらい過去を経験してきた。右目に縦傷。左肩に龍のタトゥーがある。

武器：叢雲牙、能力は秘密

第5話　知っているコト

翌日。あるニュースが世界を震撼させた。
『中東のアメリカ、イギリス、フランス軍全滅』
この知らせを信次は食堂のテレビで見ていた。
〈現地への取材はできず。今こうして外から見るコトしかできません〉
現地のレポーターの説明を聞く。この事件は3カ国と現地の兵合わせ２００人を越える死者を出した。
信次は映像の斬られた瓦礫を食い入るように見ていた。その斬れ跡が似ているのだ。『かつて自分が弟に教えた剣術に』
「・・・やはり・・・イスファル」
信次はそのコトで午前中は頭がいっぱいだった。

授業が終わり信次はアリーナで一夏達の訓練を見ていた。教えているのは箒、セシリア、咲耶の3人。
（たしかに教えてはいるが・・・）
信次は叢雲牙で軽く素振りをしながら見ている。
「こう、ずん！って感じだ」
抽象的な説明をする箒。
「防御はの時は右斜前方に・・・」
かなり理屈的説明をするセシリア。
「それより実戦だよ～！」
己の欲望だけで動こうとする咲耶。
（一夏は大変だな・・・）
完璧他人事の信次。

夕食を終え自室でシャワーを浴びベッドの上で本を読んでいる。司馬遼太郎の『龍馬がいく』を読んでいる。
「ふー！さっぱり！！」
大浴場から咲耶が帰って来た。咲耶はタンクトップにスウェットとラフな格好である。
この寮内は信次と一夏以外女子しかいないため女子はかなりラフな格好でいる。
「・・・ねぇ。今朝のテレビのコト何か知ってんの？」
突然話し出す咲耶。
「中東のコトか？別に・・・」
「嘘でしょ。あの斬撃の後は間違いなく龍天月破！！何を知っているの！！」
咲耶は信次が生きている時代に何回か戦っている。そして、彼女は相手の技を完璧に記憶するコトができる。だから、あのニュースに信次が関わっている、もしくは何かしら知っていると気づいたのである。
「・・・あれはたしかに龍天月破だ。で、犯人も知っている」
信次の起き上がりコップに水を汲む。
「オレはそいつを倒すためにこの世界に来た。この世界には亜人も魔獣もいないから立ち回りやすい」
「その犯人って？」
「まだ話せない・・・。言えるのは奴は“影”、そして、オレにこの傷を負わせた男だ」
と言って右目の傷をなぞる。咲耶は深くは探らなかった。彼のコトはよく知っているからだ。自分が死んだ時そばにいてくれた人で自分は認めてくれた人だから。

第6話　転校生は一夏の知り合い？

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実演してもらう。織斑、オルコット、藤堂、宮田。ためしに飛んでみせろ」
四月下旬。信次が来て約１週間。今日も鬼教官の授業があるＩＳ学園。
言われた通り４人はＩＳを展開させる。一夏の『白式』。セシリアの『ブルー・ティアーズ』。咲耶の『アルケー』。信次の『黒龍』。白、青、朱、黒と虹のようだ。
「よし飛べ」
織斑先生の指示に従い飛ぶ４人。だが、一夏だけ遅れている。その間信次はアクロバティックな動きをしながら翼を広げたりして遊んでいる。
「４人とも急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地上１０？だ」
「了解です。ではお先に」
まず、セシリアが先行した。
「ちょっと！」
それに続いて咲耶も。２人とも候補生とあって完璧にこなした。
「じゃあ・・・オレも」
信次も翼からスラスターを吹かせて地上へ。
（瞬動と同じ）
上手くこなす。一夏は
ズドォォンッ！！
墜落してグラウンドに大穴を開けた。そして、クラスメイトからのクスクス笑いに心が瀕死状態であるだろう。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った」
「一夏。ブラジルに挨拶しに行こうとするなよ」
織斑先生と信次があきれて言う。咲耶は空中に浮かんで大笑い。セシリアは箒と一夏のそばにいる。
（・・・大護に似てるかな）
信次はそう考えていた。

その翌日。
「転校生？」
信次達に耳にその噂が届いた。
「うん。なんでも中国の代表候補生らしいよ」
咲耶が信次と一夏　箒に説明する。
「どんな奴なんだろうな」
「気になるのか？」
「少しは」
「今のお前に他の女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」
「そうですわ、一夏さん。対抗戦に向けてより実戦的な訓練をしましょう！相手はこの私、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ」
「実戦訓練なら私も！一夏と戦ったコトないし！！」
バトルマニアがその場に入る。
（一夏は大変だな・・・）
「そういや１年全体で専用機持ちは何人いるんだ？」
信次が聞く。
「今のところ１組と４組だけだから余裕だよ」
クラスの１人が言う。

「その情報古いよ」
入り口から声が聞こえた。
「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」
小柄でツインテールが特徴の女子がいた。と言ってもＩＳ学園で男子は信次と一夏だけ。
「鈴？お前、鈴か？」
一夏の知り合いのようだ。
「そうよ。中国代表候補生、凰　鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「誰？」
信次は咲耶に聞く。
「聞いてた？中国の代表候補生。確か去年あたりからの」
咲耶は違法的な方法で情報を得ている。その能力は国家の諜報員を軽く越える。
「ふーん・・・。データは？」
「部屋。放課後ね」
「了解」
とそこに鬼教官織斑先生が登場し鈴はクラスに帰っていった。
（あいつ。完全にビビってんな・・・）

その時間の授業。信次は爆睡していた。窓側の席。陽の光が心地好い。だが、問題が１つ。担当が山田先生ではなく織斑先生の授業であるコト。隣の咲耶は見て見ぬふり。
そこに鬼教官が。
「宮田」
「・・・・・・」
反応なし。織斑先生の出席簿が高く上がる。

「ふえ？」
信次が起き上を見るとギロチンがあった。それが振り下ろされる。
「うおっ！？」
間一髪で避けたが。ギロチンもとい出席簿が

バンッ！

「へぶ！」
信次の顔面を薙ぎ払った。
「授業中に居眠りとは良い度胸だ。放課後職員室に来い」
「はい・・・」
鬼には勝てない信次であった。

放課後。信次は織斑先生に連れられ第１アリーナにやって来た。
「・・・なんでアリーナ？」
「お前の戦闘能力をコッチは正確には知らないからな。だから、罰則もかねてのテストだ」
アリーナには３機のＩＳを装備した教員がいた。
「まさか・・・戦えってか？」
「そうだ。データはコッチでなんとかしとくから存分にな」
と言って織斑先生は管制室に向かった。そこにはかなりの教員がいる。
（・・・面倒だな・・・）
信次は黒龍を展開させる。
相手は山田先生と榊原先生、柊先生。
（ＩＳは山田先生のリヴァイブと打鉄（うちがね）が２機・・・この学園の教員となると咲耶クラスか・・・）
ため息をつきながら叢雲牙を構え空へ。

〈始め！〉

織斑先生の合図と同時に山田先生がアサルトライフルが火を噴いた。

「いきなりかよ！！」

その週間、左からは榊原先生が。右から柊先生が近接用のブレードで斬り掛かって来た。単純な連携だが厄介だ。

信次は両者のタイミングを測り叢雲牙で防ぐ。

「くっ・・・」

一旦距離を取ろうとするが3人はそれを許さない。

今度は3人がアサルトライフルで追撃してくる。

それを防ぐが防ぎ切れない。シールドエネルギーが減らされていく。

最後に止めと言わんばかりに山田先生がグレネードを投擲。

「ち！」

直撃。あたりに煙りが立ち込める。

煙りが晴れ信次は黒龍の絶対防御翼を解く。

「やっぱ、生真面目は性に会わん。戦法変えっか」

信次はある音楽を流す。マク〇ロスの音楽だ。軽快なリズムを体が刻む。

「なに？宮田くん？」

困惑する山田先生。

「作戦名！『突撃ラブハート』！！」

本気で突撃する信次。

3人はアサルトライフルで応戦する。だが信次はそれを軽々しく避ける。

「なっ！」

「ええ！？」

「ハアアア！！」

信次はまず3人の距離を分断した。最初の標的は榊原先生だ。

打鉄の近接用ブレードで応戦する。

「剣道かな?だが・・・。天龍剣　浮雲!!」
鋏で榊原先生の剣を押し上げる。そして、
「おりゃゃゃあ!!」
強烈な面をかます。榊原先生は地面へ。
「次!」
次の標的は柊先生。アサルトライフルで対抗するが
「天龍剣　奥義　九頭龍閃!!」
瞬時加速で一気に間合いを詰め高速の九連撃。同じく地面へ。
最後は山田先生である。ライフルやグレネードで応戦しているが信次はアクロバティックな動きで避ける。
「イグニッションブーストまで!?」
「龍　天　月破!!」
黒い三日月が山田先生を直撃。地面へ。
信次はデータでまだ3人のシールドエネルギーは残っている。
「しめだ!!」
信次は叢雲牙に龍天月破のエネルギーを込めそれを回す。
山田先生はアサルトライフルで信次を狙い撃つが銃弾は叢雲牙から発生している黒い渦に飲み込まれていく。
「黒龍破!!」
叢雲牙を振ると渦の黒龍が3人を直撃。
この一撃が決め手となり模擬戦は信次の勝利で終わった。

信次は自室のベッドで死んでいた。
「先生3人相手・・・。よくやるね〜」
咲耶はパソコンをいじりながらポテチを食っていた。
「夕食後に食べると太るぞ」
「一応バスケ部なんで大丈夫!!」
ブイサインをする。

「はい。これ凰　鈴音のデータ」
どっから調べたかわからないデータを信次に見せる。
「ＩＳは『甲龍（シェンロン）』。アルケーと同じ第三世代のＩＳ。特徴はこの『衝撃砲』」
「衝撃砲？」
「空間に圧力をかけて放つ砲撃。ウチらの世界でいう“遠当て”みたいなやつ」
「となると察知するのは難しいな」
「一夏に言うの？」
「言わないほうが面白そうだから言わない」
「変わんないねぇ。そういえば大護くん元気だった？」
「・・・そっか。お前はあの事件の前に・・・」
「・・・やっぱ聞かないでおく。面倒でしょ？」
信次の心境を理解した咲耶はベッドにダイブした。
「時が来たら話す」
「リョーカイ」

それから数日後。クラス対抗戦の日程表が決まった。一夏の相手はあの凰　鈴音のいる２組。
一夏は鈴に言ってはならないコトを言ったらしく鈴はかなり怒っている。

これが信次と彼のファーストコンタクトになるのをまだ知らない。

第7話　イレギュラー

信次、咲耶、箒、セシリアはピットで一夏と鈴の試合を見るコトになった。
「そーいやー。一夏ってあの子に何言ったの？」
咲耶が聞く。
「前の口げんかで『貧乳』って言った」
「うわちゃあ～・・・。女の子に言っちゃいけない言葉トップ３を言っちゃたのね～。そりゃあ怒るわ」

アリーナ。
一夏と鈴が睨み合っている。
「一夏、今謝るなら痛めつけるレベル下げてあげるわよ」
「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねぇよ。全力で来い」
「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」
つまりこれは『殺さない程度にいたぶることは可能』と言っているのだ。
ビーッ
ブザーが鳴り試合が始まる。
鈴が異形の青龍刀をバトンのように扱う。一夏は初撃を避け距離を取ろうとする。
「甘い！」
見えない一撃が一夏にヒットした。

「あれが衝撃砲か」
「そう。アルケーとブルー・ティアーズと同じ第三世代のＩＳ型兵器。あれだと、３６０度狙い撃つコトが可能でしょうね～」
信次はその戦闘を見ていた。義弟の影と重なって見えていた。

一夏はハイパーセンサーで空間の歪みなどを探らせ辛くも避けているがそれではいつまでもつかわからない。
「鈴」
「なによ？」
「本気で行くぞ」
真剣に見つめる一夏。
「な、なによ・・・。当たり前じゃない・・・。格の違いってのを見せてあげるわよ！」
鈴が青龍刀を振り回す。
一夏は信次に教えてもらった瞬時加速を使い間合いを一気に詰めた。
その時
ズドォォォォン！！
すごい轟音が聞こえた。
「なんだ！何が起こって・・・」
『一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』
プライベートチャンネルで鈴が告げる。状況がわかってない一夏にセンサーが緊急通告を行った。
煙りが晴れ見えたのは手が足より長い全身装甲のＩＳだった。それ

が一夏達を襲う。

「何じゃありゃ？」
「わかってたら苦労しない」
「だな。一夏達は自分らでなんとかするつもりみたいだな」
信次はのんきに考えていた。だが、目はあの全身装甲のＩＳの動きを見ていた。その時、織斑先生がコーヒーに塩を入れてしまいそれを山田先生に無理矢理飲まそうとしている。
「先生！私にＩＳの使用許可をすぐに出撃できますわ！」
「そうしたいところだが・・・。これを見ろ」
画面に第２アリーナのスターテスが表示された。
「遮断シールドがレベル４？何これ？アイツの仕業なの！？」
咲耶がデータを詳しく見る。
信次は相手のＩＳの動きを見て１つの答えにたどり着こうとしていた。
（やっぱり・・・あれは）
その時、咲耶がピットを飛び出した。セシリアも同じく。
「お前は行かないのか？」
「咲耶とセシリアが行くなら大丈夫だろうと。後、あれ無人機だな」
信次が言った。
「なぜそう思う」
「予備動作が全くないのとさっきから一夏達が話してる時には攻撃してないから。後、動きが単調過ぎるから」
と説明すると一夏が『零落白夜』を発動し相手を斬った。そして、咲耶とセシリアの２段砲撃であのＩＳは機能を停止した。
「また会ったな・・・。竜人」
信次の耳だけにある男の声が聞こえた。信次は画面を睨む。そこに

は黒い髪で背中に大刀を背負い、左腰に長い刀を差している少年がいた。その少年は不適な笑みを信次に見せ消えた。
信次は拳を強く握りしめていた。
「イスファル・・・！」
それは信次の弟の影の名であった。

クラス対抗戦は中止となり一夏は保健室。信次は咲耶と夕食を食べていた。
「・・・影ねぇ」
信次は咲耶に自分のわかっている範疇のコトを話した。
「でも、封印したんでしょ？なんでコッチの世界にいるの？」
「光が強くなれば影は濃く、大きくなる。大護はおそらくイスファルを倒した・・・。そして、やつはこの世界に来た。それだけしかわからない」
「勝てるの？」
「勝つしかない。でも、まだ奴もすぐには動けない。だから、今のうちになんとかするしかない」
「そっか・・・」

信次は知らない。イスファルの他に最悪の敵がいるのを。そして、
運命の歯車は再び動き出す。ある人とともに・・・

第8話　ボーイ・ミーツ・ボーイ

信次がＩＳ学園に転校して来て約１ヶ月。
朝のＳＨＲ。
「今日はなんと転校生を紹介します。しかも2名です」
山田先生の言葉に信次はあくびをする。
（ねみーーー）
周りはざわついている。教室のドアが開き2人入って来た。
「失礼します」
「・・・・・・」
ざわつきが止まる。入って来たそのうちの1人が男子だったから。
「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさんよろしくお願いします」
そう言って一礼する。
「男？」
誰かがつぶやいた。
「はい。コチラに同じ境遇の方がいると聞いて。本国より転入し・・・・」
シャルルが言おうとした瞬間
「きゃあああああーーーー！！！」
ソニックウェーブが起こった。
「男子！３人目の！！」
「守ってあげたくなる系の！！」
（すげぇ元気だな・・・・・・）
信次はのんきにボーッとしていたが一気に引き戻された。
「あー、騒ぐな。静かにしろ」
織斑先生が面倒くさそうにぼやく。

「まだ自己紹介が終わってませんから～！」
信次は山田先生の言葉でもう1人の転校生を見る。シャルルの金髪と違い銀髪。そして黒眼帯。身長はかなり小さい。
（ちょっとだけ昔を思い出すな）
「・・・・・」
「ラウラ挨拶をしろ」
「はい、教官」
織斑先生の言葉に素直に返事をする転校生。
「ここでは織斑先生と呼べ。もう私は教官ではない」
「了解しました」
2人のやりとりを見ていた信次は
（軍か・・・面倒だな）
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「・・・・・・」
沈黙。
「あ、あの、以上・・・・ですか」
「以上だ」
無慈悲な解答に山田先生は泣きそうだった。
（なんかかわいそうだな・・・うん）
信次が1人納得していると

バシンッ！

一夏がラウラに平手打ちされていた。
「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
クラス中が一夏に注目している。
「いきなり何しやがる！」
「ふん・・・・」
ラウラは空いてる席に座り目を閉じ腕を組んで微動だにしない。
（咲耶に情報もらうか）

「ではＨＲを終わる。各人は着替えて第２グラウンドに集合。今日は２組と合同でＩＳ模擬戦を行う。解散！」
織斑先生が言うと信次は一夏の席へ。
「織斑、宮田。デュノアの面倒を見てやれ」
「はーい」
信次は返事をする。
「織斑君と宮田君？初めまして。僕は――――」
シャルルが言いそうになった時一夏が彼の手をとり教室を出た。
「早くしたほうがいい遅刻したら鬼の特別カリキュラムが待っている」
信次も２人の後を追う。
「いたっ！こっちよ！」
「者ども出会え出会えい！！」
各学年各クラスからの尖兵襲来。
「一夏。ここっていつから武家屋敷になった？」
と言いながら逃げる３人。
「なんでみんな騒いでるの？」

そんなこんなで更衣室に到着。
「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って読んでくれ」
「宮田信次。信次でかまわん」
「うん。よろしく一夏に信次。僕のこともシャルルでいいよ」
３人は自己紹介が終わり着替え始める。信次はその時シャルルの行動に違和感を覚えた。

第２グラウンドでありがたい出席簿アタックをくらい列につく。

一日が終わり夜9時。
「ラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツのＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の隊長」
自室で咲耶はどこから仕入れたかわからない情報を信次に見せる。
「直訳で黒ウサギ隊・・・・・。当然専用機持ちなんだろ？」
「うん。第三世代型『シュヴァルツェア・レーゲン』。たぶんＡＩＣ“慣性停止能力”を搭載した機体。情報はここまでドイツの軍事コンピューターへの侵入はこれ以上不可能」
「なんで？」
「ロックが厳し過ぎて侵入不可能」
「ふーん。シャルルは？」
「フランスのＩＳ企業デュノア社の社長の息子？ってコトは知ってんでしょ。専用機は“ラファール・リヴァイブ・カスタム？”。これはパススロットが倍だから装備はかなりある」
「そっかぁ。で、ラウラと織斑先生の関係は？」
「先生はここに来る前に1年ぐらいドイツで教官してたらしいの。たぶんそこでだと思う」
「へー。他には？」
「そこまでしかわかんない。明日一夏にでも聞いてみたら？」
「わかった」
信次が寝ようとした時
「最近、中東のテロ組織が厄介なコトやった。噂だと日本のアルケーが一体奪われた」
「・・・・・」
信次は黙っている。
「たぶん、近いうちに戦うコトになる」
「それぐらいわかってる。こっちはあんまし動けないんだ。向こうが来るのを待つしかない」
信次はそう言って眠りについた。

それから数日後。
信次、一夏、シャルル、箒は特訓するため第３アリーナに向かっていた。
「信次のＩＳって白式と同じでイコライザないんだよね？」
シャルルが聞く。
「ああ。別にオレは必要ない。龍天月破とその他もろもろで十分だ」
「つーか、信次って近接戦闘もできれば射撃もできんだろ？反則だぜ」
「嵐遁の他もあるから見してやるよ」
そんなコトを話していると
「信次！！ちょっとマズイの早く来て！！」
慌てている咲耶がいた。その慌てようからしてかなりヤバイ問題が起きているようだ。
第３アリーナへ急ぐ４人。そこではラウラ・ボーデヴィッヒがセシリアと鈴をワイヤーブレードで動けないようにし暴虐をしている瞬間だった。
「あいつ！！」
「やめろ！！」
一夏がバリアーを叩く。
「一夏！白式でこれぶっ壊せ！！」
信次の言葉に一夏は白式を展開しバリアーを雪片二型で破壊しそこから入る。
「絵に描いたような愚図だな」
シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンを向ける。
「ちっ！」
信次は瞬時加速で一気にラウラとの間合いを詰める。
「なにっ！」

「もらったぁ！！」
叢雲牙を振りかぶる。だが、ラウラは残りのワイヤーブレードで信次を狙う。
「空風流天龍剣　裏斬り」
信次が斬ったのは襲って来るワイヤーブレードではなくセシリアと鈴のワイヤーだった。その間に一夏は2人を抱きその場を離脱。
（背後の対象物を斬るだと！？）
ラウラは信次の剣捌きに驚く。
信次が距離を取ったところにシャルルがショットガンでラウラへ攻撃するがＡＩＣで銃弾が止められる。
（あれがＡＩＣ・・・・・。なら・・・！）
叢雲牙をラウラに向け
「雷遁　雷獣弾！」
虎を摸した雷のエネルギー弾がラウラへ飛ばす。
「無駄だ」
だが、ＡＩＣで簡単に相殺される。その間に信次はワイヤーブレードに捕まりバリアーに投げ出される。
「うおわぁ！！」
そして、シャルルも捕まり近接用ブレードが襲おうとした時、

ガキン！

それを止めたのはＩＳ用のブレードを持った織斑先生だった。
「ヒューー」
口笛を吹く信次。
「やれやれ、だからガキの相手は疲れる。模擬戦をするのは構わん。が、バリアーを破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いは学年別トーナメントでつけてもらおうか」
「教官がそうおっしゃるなら」
ラウラは頷きＩＳを解除する。

「織斑、宮田、デュノア、お前達もそれでいいな？」
「あ、ああ」
「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」
「は、はい！」
「僕もそれで構いません」
「以下同文」

その１時間後。
保健室でセシリアと鈴の様子を見に来た男子３人。
その時地響きが聞こえ大量の女子が流れ込んで来た。
「なんだ！？」
「な、な、なんだなんだ！？」
「「これ！」」
３人に申込書と書かれた紙を見せる。
「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うため、三人組での参加を必須とする』！？」
信次が紙を読み上げる。
「私達と組もう、織斑君！」
「私達と組もう、デュノア君！」
「私達と組もう、宮田君！」
信次はシャルルの反応を見てあるコトを確信し
「悪いな。オレ達三人で組むから諦めてくれ！」
信次がそう言った。すると女子達は素直に引いた。

その帰り道。
「ありがとね。信次」
シャルルがお礼を言った。
「気にすんな。ばれるかもしんねぇからな。お前が女だって」
「・・・・・・信次。それ」
一夏が驚く。
「心配すんな。誰にも言ってねぇよ」
「じゃなくていつから知ってたの？」
シャルルが聞く。
「つい最近。オレの鼻は警察犬並だからな。それに、オレは自分のためになる情報しかばらさねぇ主義だ」
信次はそう言って歩きだした。

第8話　ボーイ・ミーツ・ボーイ（後書き）

人物紹介。

名前：藤堂　咲耶

機体：アルケー

性格：情報収集に関してピカイチ。戦闘も接近戦なら負なし。戦闘に鳴門殺人鬼並の性格になる。

武器：次話に公開

第9話　ファインド・アウト・マイ・マインド（前書き）

咲耶の武器にはＮＡＲＵＴＯと刀語の刀を使います。漢字が間違っていると思いますがご了承ください

第9話　ファインド・アウト・マイ・マインド

学年別トーナメント当日。
信次、一夏、シャルルは更衣室で着替えを終えトーナメント表が表示されるのを待っていた。
信次はのんきに音楽を聞いている。
「信次、余裕だね」
シャルルが話し掛ける。
「まぁ、それなりに場数踏んでるからな。緊張してもしょうがねぇだろ？一夏はボーデヴィッヒと戦うコトしか頭にないみたいだしな」
「まあな。そーいや咲耶が本気出すって噂だぜ」
「知ってる・・・・・。日本の代表候補生　藤堂　咲耶。通称“鬼人の藤堂”。ボーデヴィッヒさんと同等の実力者」
シャルルが口にする。
「鬼人？」
「なんでも訓練中に相手のＩＳをズタズタにしたらしいよ」
「マジかよ」
話しているとトーナメント表が表示された。
「あらま」

Ａブロック一回戦

織斑一夏・シャルル・デュノア・宮田信次

対

篠ノ之　箒・藤堂　咲耶・ラウラ・ボーデヴィッヒ

とあった。

第1アリーナ。
観客は満席。ＶＩＰ席には各国のお偉いさんや企業関係者がいる。

男3人の目の前には打鉄の箒、アルケーの咲耶、シュヴァルツェア・レーゲンのラウラがいる。
アルケーの武装はかなり変わっていた。
（やっぱり持っていたか・・・あの七本を）
信次の目が本気の目になる。
「信次は知ってるよねぇ～？この刀達」
咲耶がオープンチャンネルか話す。
「全部持ってんだろ？虎桃族“忍び刀七人衆”の刀を」
「そうだよぉ～。あのね・・・殺してあげる」
どす黒い殺気を感じる。いつもの咲耶ではない完璧に別人。
「ど、どうしたんだよ咲耶の奴？」
一夏も怯える。
「一夏、シャルル。咲耶はオレがなんとかする。今のアイツは危険過ぎる。お前らはラウラと箒を頼む」

ビーッ！

開始の合図が瞬間。一夏の前に咲耶が出現した。手には炎刀“緋燕”が
「死んで」
ガキン！

それを防いだのは叢雲牙を持った信次だった。
「お前の相手はオレだ！」
「そうこなくっちゃっ♪」
笑っているそれは狂気の目。
2人は空へ。咲耶は緋燕を仕舞う。
「最初はこれ」
コールしたのは普通の日本刀。
「嵐刀“青嵐（セイラン）”・・・・青鯱か」
「能力はわかるでしょ！！」
咲耶が青嵐を振るう。見えないワイヤーが襲い掛かる。
「くっ！」
信次はハイパーセンサーでギリギリ回避する。

嵐刀“青嵐”。刀身に鋭いワイヤーがありそれを自由自在に操る刀。
元の所有者は青鯱。

「それの防ぎ方ぐらいわかってんだよ！雷遁　雷壁！」
周囲に雷を流す。その名の通り雷の壁だ。ワイヤーが焼かれる。
「ふーん。じゃあこれ」
次にコールしたのは斧のような巨大な刀。
「爆刀“轟怨（ゴウエン）”・・・んなモン持ってんじゃねぇよ！！」
信次が怒鳴る。すると轟怨から薬莢が飛び出す。
「せー・・・の！！」
それを振ると流星群のごとくエネルギー弾が信次を襲う。信次は弾の嵐を回避したり防いだりしながら咲耶との間合いを詰める。
そして、鍔ぜり合いに持ち込む。
「！？」
「ソイツは振り切らないと技が使えない。つまり、鍔ぜり合いに持ち込めば簡単に防げる」

信次の言葉に咲耶はつまらなそうに
「だったら・・・・」
距離をとる。鞘から2本の刀を抜いた。
「雷刀“牙”・・・・雨栗　林檎のか」
「これからだよ・・・・私の戦いは」
咲耶は構えた。
剣を振るう。それは舞うがごとく。突き、払い、それは刀が爪や牙に見える。
（牙は最軽量の刀で切れ味もある）
「だから！めんどいんだよ！！」
信次は距離をとり
「嵐遁　レイザーサーカス！！」
を放つ。だが、咲耶はそれを簡単に避ける。
信次は叢雲牙で牙に応戦する。
「あはっ！」
咲耶は笑っている。
「・・・・・後ろにご注意くださいね」
信次は微笑み距離をとった。咲耶は“しまった！”という顔になる。
背後からさっき放ったレイザーサーカスが直撃。
（この程度で終わる訳ないよな・・・・・。元虎桃族　忍び刀七人衆の頭領　藤堂　咲耶）
煙りが晴れた。そこには刀とは言えない刀を持った咲耶がいた。
「削刀“鮫肌”・・・・干柿　鬼鮫か」
叢雲牙を構える。下では箒がダウンして一夏とシャルルがラウラと戦っている。
「知ってるでしょ？鮫肌は斬るじゃなくて！削るんだよ！！」
信次が気を抜いた瞬間に間合いを一気に詰める鮫肌を振るう。シールドエネルギーが削られる。
「で、削ったエネルギーを喰らう！！」
咲耶のシールドエネルギーが削った分だけ回復する。

「そりゃ！反則だろ！！」
叢雲牙で鮫肌を抑える。
すると叢雲牙に黒いエネルギーが集まっていく。
「零距離ならいてぇだろ？
龍　天　月破！！」
黒い波動を纏った斬撃が咲耶を襲った。
咲耶は地面に激突。
ラウラは一夏とシャルルから距離をとった。
「やったのか？」
一夏が信次に聞く。
「零距離で撃ったとはいえ少しだけ芯をずらして回避された。それにこの程度で終わるほどアイツは甘くねぇ」
信次は睨んでいる。
「フフフフフ・・・・ハハハハ！！おもしろいね！！ホントにおもしろいよ！！
じゃあ・・・本気」
咲耶が武器をコールした。するとフィールドに刀が現れた。すべて形も形状も同じ刀が。
「なんだ！？」
「こんなに同時にコールするなんて・・・・」
一夏とシャルルが驚く。地面には数百本の刀。空中にも。そして、咲耶は大刀を持っている。
「千刀“劒”に断刀“首斬り包丁”・・・・鶴賀明斎に桃地斬無斬・・・・！一夏、シャルル。全力で回避行動とれ巻き込まねぇ自信がねぇ」
信次が言うと2人は空からラウラを狙う。その瞬間咲耶が刀の一本を投げた。
それを叢雲牙で防ぐ。だが、その間に咲耶が首斬り包丁で襲い掛かる。鍔ぜり合いになるが咲耶は近くにあった刀で投げる。
再び距離を取るが同じ手で徐々にシールドエネルギーが削られる。

「うわあ～・・・あれって反則じゃないですかね～。それにパススロットは大丈夫なんでかね？」
観察室で試合を見ている山田先生が言う。
「おそらくあの千刀“劒”と言う刀は刀を消耗品として扱う武器なのだろう。自分と相手の間合いを完全に支配するコトができる藤堂だけが使いこなせる武器だ」
織斑先生が説明する。
「ふぇ～。でも、宮田君、よく防いでますね～」
「アイツの剣捌きは達人の域に達している。純粋な剣の勝負なら私でも敵わないだろうな」

信次と咲耶は叢雲牙と首斬り包丁で戦っていた。
「デヤアァァァァ！！」
「ハアァァァァ！！」

ガキン！！　キン！

両者の刀がぶつかり合う。長刀の王刀“叢雲牙”。大剣の断刀“首斬り包丁”。

その時
「あああああああああああ！！！！」
耳につんざく叫び声が聞こえた。
「なんだ！？」
信次と咲耶は試合を中止し声の発信源を見る。
ラウラのＩＳがドロドロに溶け彼女を取り込んだ。
「まさか・・・・ＶＴシステム！？」
シュヴァルツェア・レーゲンがラウラを完全に取り込み新たな姿が現れた。その手には一夏と同じ雪片が握られていた。
観客席が閉ざされる。
一夏は白式が解かれた。それでもＩＳに突っ込もうとしているいたが箒に叩かれ正気に戻った。
「エネルギーなら持ってくればいいんじゃない？」
シャルルが自分のＩＳから白式にエネルギーを分け与える。
「まったく。勝ってこいよ」
信次がそう言うと一夏は零落白夜を発動しあれ斬った。そこから出て来たラウラを支えた。
「・・・・似てるかもな」
信次がぽつりと呟いた。

そして、なぜか観客席のシャッターが開いた。

ドカァァァン！！！

何かがバリアーを突き破りアリーナに着地した。
「何！？」
シャルルが驚く。
「一夏！ボーデヴィッヒを早く！」
咲耶が指示する。
信次を黙って叢雲牙を構える。

「久しぶりと言うべきかな？」
煙りが晴れ見えたのは
「竜人・・・・。」
漆黒の刀を背負い、鍔のない刀を持った。黒髪の少年だった。さらに武者のようなＩＳを纏っている。
「イスファル・・・・！」

第１０話　影ーイスファルー

目の前にいるのは1人の少年。信次が追っている人物。
「イスファル・・・・・・！」
信次の目の前に黒髪の少年イスファルは不適に笑っている。
「久しぶりだね・・・・・」
イスファルは左腰の刀に手を添える。
「挨拶だよ」
イスファルは信次の間合いに飛び居合いの構え。
「空風流天龍剣　疾風」
イスファルの高速の居合いが信次を襲う。
「その手を通じない！」
信次は叢雲牙で防ぐ。そして、イスファルの刀を受け流し自身の体を回転させ
「空風流天龍剣　凩（コガラシ）」
それをイスファルは持っている刀でいとも簡単に防ぐ。彼は後ろに飛ぶ。
「さすがだね。空風流天龍剣　初代当主　“剣神”と謳われた方だ」
イスファルが言う。
「で、“二代目”当主の影は何の用だ？」
「ただの挨拶がてらもらいに来たんだよ！この世界の力！ＩＳをな！！」
イスファルは一夏達に襲い掛かった。
だが、その前に信次が立ち塞がる。
「だったらまずオレをのしてからにしな！！」
叢雲牙とイスファルの刀がぶつかり合う。衝撃波がアリーナに響き渡る。

「咲耶！一夏とシャルルとラウラを頼む！コイツはオレがなんとかする！」
「わかった！！」
咲耶は3人を抱えピットへ
「しょうがないなぁ・・・『轟け　雷龍丸・・・！』」
イスファルの言葉に反応し雷龍丸に黒い雷が纏う。
「使うか・・・エンゲージ！！」
信次が叢雲牙に手を当てる。すると黒龍が薄い緑色の光に包まれた。
そして、翼がその色に変わった。
「舞風の力・・・・・・。格闘も魔術もこなす最強の戦士・・・・・・。楽しめそうだ！！！」
イスファルが襲い掛かる。雷龍丸から雷が放たれる。信次はそれを叢雲牙で防ぐ。
イスファルは鞘と刀を使い信次の防御を崩そうとする。
信次はその一瞬の隙をつき
「空風流天龍剣！風奏（カゼカナデ）！」
右足を軸にしインフィニットに回転斬りを喰らわせる。

ガキンッ！！

だが、イスファルはその回転斬りを刀と鞘を使い防ぐ。
信次は左手にエネルギーを集める。
「風遁　列空弾！！」
左手に凝縮された風の一撃が直撃する。だが、イスファルは体を後方に飛び威力を半減させ、とっさに背負っている大刀で防いだ。
信次はあくまで今回は小手調べ。イスファルも同じだろう。
その時、イスファルに通信が入った。
「今からいいとこ・・・・。ハァ、わかったわかった！！帰りますよ！！」
イスファルは通信を切る。

「じゃあな。今回の勝負はお預けだ」
イスファルは空へ。
「お前だろ？中東の軍全滅の犯人」
信次が聞く。
「そうだ！当たり前だろ？人は死ぬためにいるんだから！！それと朱き傭兵と革新者がいる」
イスファルはアリーナを飛び出し空へ消えた。
信次はエンゲージを解く。
（朱き傭兵と革新者・・・・厄介だな）

その後。トーナメントは当然中止。
怪我人はラウラ以外は全員軽傷だった。

信次は織斑先生に連れられとある部屋にいた。
「宮田。お前はなにを知っている？」
「あの男はイスファル・・・・一言で言うなら“影”だ」
「影？」
「オレの義理の弟の」
「で、その影は一体何なんだ？」
「それはまだ話せない。まだ話せないんだ・・・・・。時が来たら話しますよ。アイツのコトもオレのコトもね」

その後、信次が使えるようになった大浴場では一夏とシャルルが入っていたため、信次は彼らが来るのを待つはめになった。

翌日。

「今日は皆さんに・・・・転校生を紹介します」

朝からテンションがかなり低い山田先生。

それで、入って来たのは

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

女子の制服を着たシャルルもといシャルロットだった。

そして、周りがざわつき始め

「昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね!?」

バシーン!!

「一夏ぁっ!!!」

ＩＳを展開した鈴がドアを破壊し登場。背後に昇竜が見える。

「死ね!!!」

衝撃砲がフルパワーで解放される。

（死んだな・・・・）

信次は心の中で合掌した。

だが、間一髪、黒いＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏った。

ラウラがＡＩＣで衝撃砲を相殺した。

ラウラが一夏の胸ぐらを掴まれ、引き寄せられ、一夏の唇を奪った。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」
宣言した。
あの光景にはさすがの信次も咲耶も驚く。

そして、クラスが揺れた。

？？？。

「ただいま～」
高層マンションの最上階の窓から入るイスファル。
部屋には女性が3人、男性が2人いた。
「どうだったの？その竜人ってのは」
薄い金髪の美しい容貌の女性が尋ねる。
「今日は小手調べ、でも、厄介だ。」
イスファルは楽しそうに言う。
「スコール。次はオレが行く。大将！オレのＩＳはできるんだろ？」
酒を飲んでいる。赤茶色の髪の男が薄い緑の髪の青年に聞く。
「出来てるよ。サージェス」
「決まりだな・・・・。さぁ！楽しい楽しい戦争の始まりだぁ！！」
その男　アリー・アル・サージェスは邪悪な笑みをしていた。

第11話　オーシャンズ・イレヴン（前書き）

3巻突入！

今回はアニメ学校の怪談のとある話を入れました

第11話　オーシャンズ・イレヴン

個人別トーナメントから数週間後。

日曜日の朝。

「おきっろーーーー！！！」

信次は同居人の悪魔に叩き起こされていた。

「何だよ？まだ9時半じゃねぇか」

「今日は水着買いに行くって約束！」

「ハイハイ・・・・・・」

信次はあくびをしながら準備をするコトになった。

信次と咲耶は『レゾナンス』に来ていた。ここは信次が最初に日用品などを買いに来た場所である。

「んじゃ、オレテキトーにぶらぶらしてっから」

信次は自分の水着を買い終えて勝手にどこかへ行ってしまった。

咲耶は水着売り場で水着を選んでいると一夏、シャルロットが山田先生と織斑先生に怒られて？いてそれをセシリアと鈴が眺めていた。

「盗み見している3人。出て来たらどうだ？」

織斑先生に言われ出て来る3人。

で、なぜか山田先生に連れられている咲耶、鈴、セシリア、シャルロット。
（家族・・・・・・かぁ・・・・・・）
咲耶はちょっとうらやましいと思っていた。
「咲耶は1人で来たの？」
シャルロットが聞く。
「信次と。たぶんゲーセン荒らしやってると思うけど」
「ゲーセン荒らしですか・・・・。藤堂さん。宮田くんがしてる指輪って何ですか？」
山田先生が聞く。
「・・・・ユナイトリングって言う特別な指輪らしいですよ」
「へぇ～」
5人が話していると
ワアアアアア！！！
ゲーセンから騒がしい声が聞こえた。
5人が見ると信次が3Dのシューティングゲームですごい乱れ撃ちを披露していた。
得点９９８７１。今までの最高得点らしい。
「信次すごーい・・・・・・」
鈴が褒める。
「近接戦闘しかできないと思ってましたが・・・・・・・」
セシリアが。
「信次って何気にオールラウンダーだから・・・・・・・」
咲耶が説明する。
その後、信次はレゾナンスのゲーセンを嵐のように荒らしたとさ。

臨海学校初日。
「海なんて久しぶりだ」
信次は大きく伸びをする。
「まさか部屋が千冬姉の部屋とは思わなかったけど」
一夏が続く。
2人はとりあえず水着に着替える。すると一夏は信次の左腕に黒い龍のタトゥーがあるのに気がついた。
「信次、それって」
「ん？このタトゥーか？これはオレが生まれた時からあったらしい」
「へー、信次の親は？」
「オレは施設育ちだ。母さんがオレを産んでから入院しちまって。それから5歳までは孤児院みたいな場所。5歳の時に母さんが他界。それから知り合いん家に勝手に居候してた」
信次は淡々と話す。
「わりぃ・・・・・。その・・・・・・」
「気にするな。もう昔の話しだしこれでおあいこだ。さて！泳ぐか！！！」
と言って信次は海へ走って行った。

その夜。
信次は“教員室”と書かれた部屋の冷蔵庫の中を見て笑っていた。
「やっぱりあったか・・・・！」
中にある缶を手にする。星のマークが綺麗に見える。
ソファーにどっかりと座り缶に手をつける。
「やっぱ！これがなくちゃ！！！ビール！！！」
そう信次が手にしているのは缶ビール。
「ほう・・・。未成年が飲酒とはこの部屋でいい度胸だなぁ」
悪魔の声がした。その後信次に鉄槌が降った。

それからしばらくして部屋には一夏、咲耶、セシリア、シャルロット、ラウラ、箒がいる。織斑先生は先生達の会議があるそうだ。
「うしっ！！こういう時は恒例のあれをやるか！」
信次が言った。
「何をするのだ？」
ラウラが聞く。
「オレの怖い怖い話・・・・」
「怖い話？なんですのそれは？」
セシリアが聞く。
「日本じゃ夏に怖い話をするんだ。って言っても都市伝説とかだけど」
一夏が説明する。
「こ、怖い話？」
シャルロットは震えている。
「信次やめよう泣く人が出るから・・・・・・」
咲耶が止める。
「そんなに怖いの？」
鈴が聞く。

「ドイツ軍の訓練より怖い自信はある」
信次が自信満々に言う。
「ほう。では相手になろう」
ラウラが腕を組む。
「決定！」
信次は蝋燭とライターを取り出し部屋の電気を消し蝋燭に火を付けた。
「や、やめようよ～」
咲耶とシャルロットが言うが
「オレはやると言ったからにはやる男だぜ」
「で、話はなんだ？」
箒が聞く。
「じゃあ、『ババされ』の話から」
「ちょっと待って！！早くない！？」
咲耶が止める。
「これが一番いいんだよ」
「良くない！！」
「何だよババされって」
一夏が聞く。
「オレがいた町の都市伝説だ。じゃあ始めるぞ」

オレが小学校5年生の頃の話だ。その頃学校である噂が流行っていたんだ。

噂？

そう、なんでも急に入院するやつが増えてななんでもかなり怖いもんでも見たんじゃねぇかって言われてな。だからってべつに気にもせずにいたんだ。

ある日。今日はなんでも町内会の慰安旅行とかで親がいなかったんだ。でも、オレには親がいねぇから知り合いん家に居候してたんだ。で、その日の夜。オレは知り合い2人と遊んでいたんだ。1人は准って言うのともう1人は桃子って言う先輩だった。

オレ達はピザを頼んだ。来るのは19時30分ぐらいのはずだった。

19時頃テレビを見てた時、突然

ドンドンッ!!ドンドンッ!!

って誰かがドアを叩いているんだ。

『おいおい。まだ7時だぞ』

『べつにいいではないですか』

『そうだな』

オレ達は玄関に行った。途中で准があるコトに気がついた。

『おい・・・なんでピンポン押さないんだ?』

『『あ゛・・・・・・』』

なんで?

オレがドアを開けるコトになった。

ゆっくりドアを開けたら・・・

開けたら?

目の前に鎌を持ったお化けみたいな女の人がいたんだ!!

ええー！？

『出たあ！！！』
『・・・・・・』
『うわあ！！！』
オレ達はドアを閉めた。だが、鎌でこじ開けられた。
『ヒャッハハハハハハハ！！！』
ババされは笑っていた。鎌がオレ達に向けられた。
『ババされババされババされ』
オレは恐怖のあまりにババされって連呼した。するとババされが急に苦しみ出した。
そして、消えた。

「これがババされのお話」
信次が言い終わるとみんな震えていた。
「結局、そのババされはどうなったのだ？」
箒が聞く。
「霊眠した。でもあれは人の恐怖心から発生したって話だ」

ドンドンッ！！ドンドンッ！！

急に部屋のドアを叩く音がした。
「信次さん・・・・・・まさか・・・・・・」
「そんなまさか・・・・・・」
全員が顔を青ざめる。
「織斑先生かも知れない・・・・・・」
信次がドアをゆっくり開ける。そこには赤い目の女のお化けが・・・

・・・！！

「でたーーー！！」
「キャアーーーー」
「ババされババされババされババされ！！！」
悲鳴とともに信次が霊眠の言葉を連呼する。
「誰がババだ！！！」
信次の頭に鉄槌が降った。いたのは織斑先生と山田先生だった。

その後それまでの経緯を話した。
「なるほど。怖い話か」
「その話の通りに私達が来たから焦ったと」
両名が納得が行く。
「じゃあ続きを・・・・・・」

それから零時まで信次の怖い話は続けられた。その時女子が全員泣き目だった。
そして、挙げ句の果てには織斑先生までも泣き目になっていた。

第１２話　その境界線の上に立ち（前書き）

久しぶりの投稿。

震災などで出来ませんでした。

第１２話　その境界線の上に立ち

臨海学校二日目。
今日はＩＳの装備試験。専用機持ちは換装パーツのテストを行う。
「全員、迅速に行え」
織斑先生の指示で一同作業に入る。ちなみに信次は換装パーツもないため咲耶の手伝い。
「信次手伝って！」
「はいよ～」
信次が咲耶の手伝いに入ろうとすると
「ちーちゃ～～～～～～ん！！！」
無茶苦茶速いなにかが来る。
（なーんか面倒事がおきそうだ）
信次が考えていると
「私が天才の束さんだよ、はろー」

「咲耶。あの人が」
「そう。箒の実姉の篠ノ之束博士」
咲耶の説明を聞きながら彼女と織斑先生のやり取りを見る。
（知り合い・・・・・。オレと准みたいななかか）
親友のコトを思い出していた。
（准なら大護を・・・・・・）
「信次！」
咲耶に呼ばれ横を見る。
「あんまり考えこまないほうがいいよ。あの子なら大丈夫なんでしょ？現にイスファルがこの世界にいるんだから」
「そうだな」
その頃束は箒の専用機『紅椿』の設定をしている。

「そーいやあの人、ここ関係者以外立入禁止じゃなかったか？」
「ツッコムのはやめよう」
2人が話していると
「君がいっくんのほかにＩＳを動かせる男子？」
束が信次に話してきた。
「ハイ」
「ちょっと見せて」
言われた通り信次は黒龍を展開する。
「ふ～ん・・・・“竜”みたいなＩＳだね～。おまけにわけわかんないブラックボックス付き」
束は黒龍をまじまじと見ている。
「質問していい？」
「？なんですか？」
束が急に聞いてきた。
「キミってホントに人間？」
その言葉に信次は若干目を吊り上げてしまった。
そして、巨大な刀を持った咲耶が束に襲い掛かる。しかも狙うのは首、頸動脈。

ガキン！！！

首斬り包丁を信次が左腕で防いだ。
「咲耶。やめろ・・・・・・」
信次が言うが咲耶は刀を退ける気がない。
「咲耶・・・・。オレに二度言わせる気か？」
睨む。本物の殺気で、周囲が震える。
「ゴメンナサイ」
咲耶は首斬り包丁を量子に戻した。
「織斑先生！！た、た、大変です！！！」
山田先生が血相を変えて走ってきた。そして、織斑先生に小型端末

を渡す。
「特務任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし・・・・」
織斑先生と山田先生が手話で何かを伝えあっている。

「・・・・・占いは当たりますってか・・・・」
信次は空を眺めた。雲が速く動いている。
（次は誰だろうな・・・・・・）

「では、現状を説明する」
旅館の1番奥にある宴会用の大座敷・風花の間に専用機持ち全員と教師陣が集められた。
「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオン・ゴスペル）』が制御下を離れ暴走。そして、衛星での追跡の結果、ここから2キロの空域を通過することがわかった。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった」
織斑先生の話に耳を傾ける信次。
「質問のあるものはいるか？」
「はい。目標の詳細なスペックデータを要求します」
セシリアが手を上げる。
信次はデータに目を通す。
「このスペックだと一撃で仕留めないとね……」
咲耶が言う。
「となると、やるのは……」
全員が一夏を見る。
「俺!？俺が行くのか!？」
「「「「「当然」」」」」

6人が同時に言う。
「織斑、これは訓練じゃない。実戦だ。覚悟がないなら無理強いはしない」
「やります」
一夏は決意した返事をした。

それから数十分後。
一夏と箒による作戦が決行されようとしていた。
信次は一夏のところに行っていた。
「信次」
「一夏。実戦ってのはなにがあってもおかしくはないぞ。まっ、死なねぇことを祈ってる」
信次はそう言って旅館に戻った。

その後。作戦は一夏、箒両名の撃墜で終わった。

第１３話　赤き傭兵

作戦か数時間後。
時刻は夕方になった。一夏は福音の攻撃から箒を庇いまだ目を覚まさない。

「こうなるって予想してたの？」
咲耶が信次に聞く。
「まあな・・・箒のあの浮かれよう見て感じていた。福音は？」
「たぶん、ここからそう遠くない所にいると思う。上層部からの通達がないから」
「そうか。さて・・・準備すっか！鈴が箒を何とかしてっと思うからな」
信次が大きく伸びをする。
「ホント変わんないねぇ～そういうとこ」
咲耶が飽きれたように言う。
信次はその言葉に微笑み歩き出した。

浜辺で
鈴が箒を説得しセシリア、シャル、ラウラも準備万端。そこに信次と咲耶が合流する。
「福音はここから３０キロの地点にいる。作戦は・・・・・」
信次が作戦を伝え、７人がＩＳを纏い星が輝く夜空へ飛び立った。

「ラウラ！一発かませてやれ！！」
胎児のように丸まっている銀の福音。それにラウラが八〇口径レールカノン“ブリッツ”で福音に狙いを定めたその時
「ところがぎっちょん！！！」
男の声とともに7人の上空から紅い光弾が降り注いだ。
「なにっ！？」
全員が回避する。
そして、7人の前に咲耶と同じ日本の第三世代型ＩＳ“アルケー”を纏った男が現れた。
「さあ！おっぱじめようぜ！！ＩＳ同士による楽しい戦争をなぁ！！」
朱色の髪の男が鋸のような巨大な刀を向ける。
「アリー・アル・サージェス！？なんでてめぇがここに！？」
信次が声を上げる。
「理由なんてどうでもいいだろ！俺は戦争をしに来たんだよぉ！！」
サージェスが鋸の大刀“キリバチ”で信次に襲い掛かる。
「くっ！」
叢雲牙で防ぐ。それに反応した福音までもが襲い掛かってくる。
「作戦変更！こいつはオレがなんとかすっから！お前らは福音をやれ！！」
信次が大声で6人に指揮を出す。
「わかった」
ラウラが砲撃に入る。それに続き他の5人も戦闘態勢に入る。
「行かせるかよ！！」
サージェスが左手に常備されているハンドガンを6人に撃つ。
「てめぇの相手はオレだ！！」
信次が龍天月破を放ち光弾を消す。
「てめぇは邪魔なんだよ！！」

サージェスが襲い掛かる。
「こっちは聞きてぇことがある!!」
キリバチと叢雲牙がぶつかり合い。戦いが始まった。

それを衛星を通して見ている千冬と真耶は画面の映像に驚いていた。
「あの子達・・・それにあのアルケーを操っている男は一体・・・・・・」
真耶が画面を見ながら状況を言う。
「・・・・・あの男だろう先月の日本の第三世代型ＩＳアルケーを強奪したのは・・・それを改造したのだろう。あの紅い粒子は謎だがな。あと、こうなることは大体予想していた。山田先生。データの採取をお願いします」
「はい」
千冬は画面を睨んでいた。
（あの男・・・かなり強い・・・それに宮田は何か知っている、藤堂も・・・・・・）
千冬には嫌な気配が漂っていた。

海上では紅と黒の軌跡がぶつかり合っていた。
「おらおら!!どうした!?この程度か!?」

サージェスは小刻みに機体を動かし信次に狙いを定めさせない。
「チッ」
信次は一旦距離を取る。
（ここなら・・・“水廉”だ）
「エンゲージ！」
黒龍を水色の粒子が包み込む。水が弾ける音とともに翼の色を水色に染めた黒龍が姿を現した。
「それが噂に聞く“エンゲージ”の力か・・・・・・これで楽しめそうだ！！」
サージェスが躍り掛かる。キリバチが信次に襲い掛かる。
だが、水のベールがそれを防いだ。
「なにっ！？」
そして、水が矢となってサージェスに襲い掛かる。
「ウオッ！」
水の矢を避けた。いや、ある場所に誘い込まれた。
「龍　天　月破！！」
すでに自分の得意技で待ち伏せていた信次。叢雲牙を振り切る。
黒い月の波動がサージェスに直撃する。
だがサージェスはギリギリのところでキリバチで龍天月破を防いだ。
「確かこの技は神威が作った技・・・皮肉だなぁ、かつての師匠にお前は殺されたのか？」
余裕のサージェス。笑っている。
「やっぱりお前は生きていたのか・・・玖音にやられたと思っていたけどな。・・・・・・となるとお前を倒したのは嵐か？」
「ああ、あの狐とクルジスのガキにやられたんだよ・・・・・・そしてまた、あの狐にやられてこの世界に来たんだよ・・・！」
「・・・・・2回死んだのか？じゃあ、3回目。逝くか？」
「なめんなよ。こっちにはＧＮドライヴがある。コイツは俺の魔力がある限り稼動させられる！知ってんだろ？俺は魔殖細胞は組み込んだこと。テーゼ委員会ですらなしえなかったこの体！てめぇに勝

ち目はねぇ」
サージェスが勝ち誇るように言う。
「たしかにその能力はきついな・・・・・・でも、それは普通の人間にはだろ?オレは・・・だからな」
信次が最後に言った言葉はサージェスには聞こえなかった。
「じゃあ。続きをするか・・・」
信次が叢雲牙を構える。サージェスもキリバチを構える。
2つの大刀がぶつかり、衝撃波が生じる。大気が悲鳴をあげる。
「水遁　水龍弾!!」
海水が龍の形になりサージェスに襲い掛かる。
「その程度でやられるかよぉ!!」
力任せにキリバチを振り水龍は消す。それは並たいていの力ではない。
だが、これで終わるほど信次は甘くない。
「もらったぁ!!!」
叢雲牙に龍天月破を纏いサージェスに斬りかかる。
「ところがぎっちょん!!」
サージェスは左足か朱いビームサーベルを出し一時凌ぎだが叢雲牙を防ぐ。そして、距離をとりながらハンドガンで牽制する。
その時、信次は誰かが来るのを感じた。
「たくっ!遅いんだよ・・・」
信次の視線の先に白い流星が見えた。

一夏だ。

「真打ちの登場だ。邪魔はさせねぇ!」
信次はサージェスを追撃する。
「これならどうだ!!」
アルケーのサイドアーマーから10個の金属の何かが出てきた。
「行けよ!!ファングゥ!!!」

サージェスの声とともに１０機の牙が信次に襲い掛かる。
ファング。それはサージェスが駆るアルケーの特殊装備の一つ。ブルーティアーズと同じＢＴ兵器の一種。だが、ブルーティアーズと違いファングは射撃型ではなく、その名の通り“牙”。相手を噛み殺すかのように動く。
「おらおら！どうした！？」
「くそ！」
予想以上に速い。信次は叢雲牙と翼は使い防ぐ。
「こうなったら！水遁　大瀑布！！」
海水の水を大量に使いファングを洗い流す。それはさながら滝のようだ。
「はっ！なんでもありかぁ！！」
再びぶつかり合う。
突然、サージェスに光弾が降り注いだ。
「なにっ！？」
サージェスの視線の先には緋燕を持った咲耶、新装備“雪羅”を構えた一夏がいた。
「さすがに７対１じゃきついか・・・じゃあな！」
そう言うとサージェスはＧＮドライヴか大量の粒子を出しその戦場から離脱した。
「・・・終わったか・・・」
信次は安堵のため息を吐いた。
（サージェスがいるとはな・・・これは予想以上に辛い戦いになりそうだ・・・）
信次は星を眺めながらそう思った。

第１４話　新たなる戦いへ

「作戦完了。と言いたいとこだがお前たちは重大な規則違反をした。よって帰ってから反省文の提出と３日間の特別教室の生活が待っている。忘れないように」

戦士たちの帰還は予想以上に厳しいものだった。正座をさせられ３０分。セシリアの顔が赤から青に変わり始めている。

「織斑先生。そのくらいで・・・けが人もいますし」

山田先生が止めに入る。手にはスポーツ飲料のパックやら救急箱がある。

けが人と言っても信次が腕に軽症を負ったくらいだ。

「ふん」

織斑先生はかなりご立腹の様子。

「じゃあ順番に手当てしますかね」

それから数時間後。

千冬は信次を探していた。途中咲耶に居場所を聞き彼が屋根の上にいることが分かりそこへ向かった。

「♪～♪♪～～♪～♪～～♪～♪～」

屋根からオカリナの音が聞こえた。その音はまるで海の潮に共鳴しているかのように静かだった。

「なにかようですか？」

信次はオカリナを吹くのをやめる。

「こんなところでオカリナを吹いているとはな」
「これ、“海鳴りの笛”って言ってな。海の守り神を鎮めるためのものだ」
と言って信次は日本酒の入ったビンを口に持っていく。
「で？何のよう？」
「あのアルケーに乗っていた男は何者だ？」
「・・・アリー・アル・サージェス。オレと同じ世界にいた傭兵だ。オレのダチの師匠を殺した男だ」
「・・・・・・」
千冬は黙って信次の言葉に耳を傾けた。
「あいつがこの世界にいるってことは嵐のやつが仇を果たしたってことか・・・まっ、今のオレにはどうでもいいけどな」
信次は酒を一気飲みする。
「お前は言っていたな『オレは死んだ身』だと。お前はなぜ死んだのだ？」
「それはまだ話さない。ただ、オレを超える未来にバトンを托しただけだ」
その時の信次の顔はどこか寂しげだった。
「それだけ。じゃあオレは寝るんで」
信次は屋根から飛び降りた。

？？？
イスファルは再び紛争地域にいた。身体を赤に染めている。
「さぁ。ここからが本当の戦いの始まりだ」
闇に消えた影。

それは新たな戦いの幕開けになる。

翌朝。信次の左頬に大きな赤い手形ができていた。
「おまけに二日酔い・・・」
信次は唸っていた。
「ハイ。レモン水」
咲耶がさっぱりするレモン水を渡す。
「これからだ・・・」
「え？」
「これからが本当の戦いだ・・・」
信次はそう言った。咲耶にもそれがどういう意味か分かっていた。
「信次・・・」
かつて、自らの命をなげうって彼らを未来へ導いた咲耶は風が痛く感じていた。

緊急告知

まことに勝手ながら作者が急病のため更新が約１０ヶ月の間できません。

そのため、現在書いております小説はしばし更新されません。

読者の方々に迷惑をかけます。

しかし、時たま更新できるかもしれませんのでみなさん待っていてください。

なにとぞ、ご迷惑をかけますがよろくしお願いします。

ＩＳにつきましては原作が終了してから書くかもしれませんのでご了承ください。

信次「作者が急病かぁー。オレたちも気をつけねぇとなぁ」

咲耶「そうだね。読者の皆さんも気をつけてねぇ」

信次「では、また会うひまで！！」

第１５話　エンゲージと新たな恐怖と・・・（前書き）

約２ヶ月ぶりの更新。

病院から隠れての更新。

早く退院したい・・・

第１５話　エンゲージと新たな恐怖と・・・

夏休み。

宮田信次は藤堂咲耶と朝食を食べていた。
「信次。私、ちょっと今日研究所に行ってくるから」
「研究所？なんでまた？」
「整備とサージェスのアルケーの情報もらって来る。それに操縦者のことも気になるから」
「そうか・・・。じゃあオレは・・・」
と信次が言おうとしたとき、
「宮田、今日はお前のデータを取らせてもらうぞ」
突然の織斑先生の登場。
「データ？前に取ったんじゃ・・・」
「お前の能力がサッパリわからんからな。そのためだ」
「わかりました」

それから、４時間後。
「で、オレを食事に誘うなんて珍しいって、言うよりなんかありますよね？織斑千冬さん」
昼食の時、信次は千冬に呼ばれ市街地のとある定食屋にいた。
「お前はあまり人がいるところでは話さないだろう？」

「まあね、で、聞きたいことは？」
信次は頼んだカツ丼を口に運ぶ。
「あの、アリー・アル・サージェスとお前のエンゲージという力についてだ」
「・・・・・サージェスは前にも話した通り、オレの師匠の如月玖音を殺した男だ」
信次はオレンジジュースの入っているコップを口に持っていく。
「お前の師を？」
「ああ、サージェスはオレと同じ世界にいた人間だ。あいつは今も昔もやってることはかわんねぇ・・・。あいつは戦争中毒なんだ。人を殺すのを何とも思わないロクデナシだ・・・！」
「では、その男がこの世界にいる？」
「さぁな？そこまでは知らん。ただ・・・」
「ただ？」
「イスファルが関係しているのは間違いない」
信次はコップの中のオレンジジュースを飲み干す。頼んだカツ丼を口に運ぶ。
「そのイスファルという男の情報は教えてはくれないのだろう？」
「ああ。じゃあ、本題に入るか。
まず、オレのいた世界には魔法が存在した」
「魔法だと？」
千冬は目を見開く。
「ああ。ここからは一気に説明する。
魔法には８つの属性が存在する。火、水、風、土、雷、光、闇、無の８つが存在する。この世界でもそれは同じ、だが、この世界にはマナと呼ばれる魔力の元になる空気が少ない。だから、あまり使い勝手のいい能力ではないが、オレはちょっとだけ特別なんだ。
たいてい、属性は１人に一色。だが、オレは無以外の７色の属性を扱うことが可能だ。
これは７人の魔女と契約したからなんだがな。

これによってオレは自身のＩＳにそれぞれの能力を付加させ、魔法を使うことが可能なんだ。
これがエンゲージの説明だ」
「つまり、まだお前は５つの力を隠しているのか？」
「そういうコト。説明終わり」
「お前は何者だ？」
千冬が問う。
「・・・オレは、かつてマスターと呼ばれいた男だ・・・。そして、弟をかばって死んで、この世界に来たんだ」
その時の信次の顔は悲しい顔だった。
（お前は一体何を経験して来たのだ？宮田、お前は一体・・・）
千冬にはまだ信次が何者なのか理解できなかった。

～？？？～

「サージェス。あなたにはあの宮田信次の抹殺と黒龍の強奪をしてもらうわ」
美しい金髪をなびかせている女性が言った。
「わかった。で、できてんのかよ？アグリッサってのは？」
サージェスがイスに座っている。薄い緑色の男に聞く。
「できているよ」
男は静かに答えた。
「俺もいくからな、闇の中からイスファルの声が響いた。
「じゃあ、オータムと一緒に行って頂戴」
女性が不気味に微笑んでいた。

イスファルは紅い瞳に狂喜の色を浮かべていた。

第１６話　来訪者とそれぞれの夜

２学期が始まり１週間が経過した。

一夏はいつもの面々と朝食を食べていた。だが、そこにもう１人のＩＳを動かせる男子がいない。いるのは、彼の同居人だけ、

「咲耶。信次はどうしたんだ？」

「信次ならちょっと二日酔いみたい。ちょっと遅れるって、言ってた」

咲耶は純日本食を食べている。

（こういうところは箸に似てんだよな・・・）

と言いながら一夏も箸を進める。

「そうーいや、今日は実習あったよね？一夏、今日こそは戦ってもらうよ」

悪魔の笑みを浮かべる咲耶。

「マジで遠慮する・・・」

「そうだよ。前に咲耶ってば一夏を半殺しまで追い込んだんだから」

シャルロットが止めに入る。

実際に夏休み中に一夏と咲耶が本気で模擬戦をした時、忍び刀七本すべて使い一夏を半殺しにしたらしい。その時、信次がいなかったら一夏は完全に死んでいただろう。

「ええ～～！？つまんない！！」

子供のように頬を膨らます咲耶であった。

ホームルームの時間。信次はまだ来てない。
（信次まだ来ないの？これで鬼の地獄の時間は信次に決定かな）
他人の不幸を喜ぶ悪魔が１人いる。
「皆さん。おはようございます。今日はまず、転校生を紹介します」
山田先生の言葉にクラスが騒がしくなる。このクラスには転校生が異常に多い。
（どうせ、一夏と信次関係でしょうね・・・）
咲耶は完全にボーッとしながら前を見ていた。
「では、入ってください」
山田先生の声で入って来た人物に咲耶は言葉を失った。
「嘘でしょ・・・・・・」

「頭いてぇ・・・飲み過ぎたなこりゃ」
信次はホームルームが始まっている時間。頭に手を当てて廊下を歩いていた。
昨日は満月。月見酒には持ってこい。そのため信次はどこから仕入れたかわからない日本酒をビン３本程飲んでいた。
「３本でここまでようか・・・。どうしようもないな」
精神は２４歳でも肉体は１６歳。酒を飲めば酔って二日酔い。そして、待っているのは鬼教官の特別カリキュラム、もしくは地獄。
本日はどうなるのか。

信次はあくびをしていると教室の自動ドアが開いた。目の前には
「スイスから来ました。アルティ・ウクライナです。よろしくお願いします！」
薄いピンク色の髪に人懐こい笑顔の少女がいた。
「・・・・・・」
信次は彼女を見て絶句していた。考えていた言い訳さえ忘れそこに

立っている。

「宮田。またか？・・・どうした？」

織斑先生が突っ込むが信次は口を開けようとしない。

「あ・・・」

信次が彼女の名を呼ぼうとしたとき、

（また後でね信次）

アルティの声が頭に響いた。

（念話・・・）

信次は黙って頷き席に着いた。

「今日は2組と合同で実習を行う。宮田。今日は・・・」

織斑先生の最後の言葉は聞き取れなかった。が、全員が心の中で合掌をしているだろう。

一夏と更衣室で着替えている信次は複雑な顔をしていた。

「どうしたんだ？まだ、二日酔い治らないのか？」

一夏が聞くが信次は聞こえていないようだ。

「信次！」

一夏が大きな声を出す。

「！？どうした？」

「どうしたのはコッチのセリフだ。今日のお前何かおかしいぞ」

「いや、ちょっとな・・・大丈夫だ・・・。もう集中する。鬼の地獄のカリキュラムが待ってるからな」

その頃、女子更衣室では
「久しぶりね。咲耶」
アルティと咲耶は一緒に着替えていた。と言っても下にＩＳスーツを着ているため脱ぐだけ。
「ホント・・・。何年ぶり？」
「さぁ？でも、びっくりした。ニュース見たら2人が映ってるだもの」
「それで転校して来たの？」
「うん」
アルティが顔を赤める。
「今度聞かせてね」
その時、咲耶の瞳が悲しい色だった。

「今日は格闘戦を重点的に行う。宮田！それと、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒ！準備しろ！」
「・・・・・まさか、１対４？」
信次が恐る恐る聞く。
「当然だ」
鬼がいる。
（信次。頑張って！）
再びアルティの念話が入る。
（頑張れって、お前も無茶言うなよ・・・）

信次は黒龍を展開する。４人もそれぞれのＩＳを展開する。
「では、始め！！」

織斑先生の声で模擬戦が始まる。

最初に仕掛けたのはセシリア。スナイパーライフルで信次を狙う。
が簡単に避けられる。そこに鈴とシャルロットが同時攻撃を仕掛け
るがそれもまた、簡単に避けられる。

「ハア！」

ラウラがワイヤーブレードとプラズマ手刀で接近戦に持ち込む。信
次はワイヤーブレードを避けるが攻撃しようとしない。
その行動を見たラウラは絶句した。

「な、何だと・・・」

ラウラの様子に他の3人も信次を見る。3人も言葉を失う。

「嘘でしょうね・・・」

「なんでなのよ？」

「冗談だよね？」

3人が見たのは、信次が目をつぶっていたのだ。

「空風流天龍剣　舞之型　浮雲・・・。今のオレは風と同じだ」

信次がゆっくりと目を開ける。

「さてと、いっちょやりますか！」

叢雲牙を構える。

「このっ！！」

鈴が衝撃砲を撃つが信次は見えない砲撃を軽々と避ける。
そこにセシリアがビットを使い背後から攻撃するが避けられ鈴に直
撃。
セシリアが驚いている隙をつき

「空風流天龍剣　長刀之剣　龍槌閃！」

空高くからの強烈な一撃でセシリアはダウン。

シャルロットとラウラがコンビネーションで攻撃するがすべて紙一
重で避けられる。

「くっ・・・」

焦れたラウラが接近戦に持ち込むが
「甘い・・・！龍　天　月破！」
黒い斬撃を食らいダウン。
続いてシャルロットも信次の一撃を食らいダウン。

結局、信次が４人相手に圧勝して模擬戦は終了した。

夜になった。
信次は自前の瓢箪に日本酒を入れ月を眺めながら酒を飲んでいた。
隣にはアルティがいる。
「久しぶり・・・って言うのかな？」
「さあな？また会えるとは考えもしなかった。アルティ・・・あの時は・・・」
「大丈夫だよ・・・信次を恨んで何かないから」
アルティが優しく微笑む。その顔に信次も笑顔で返す。
「ねぇ、また契約していい？」
「構わない・・・」

月光のなか、２人の影が重なりあった。

その頃、咲耶は山田先生の部屋にいた。
「藤堂さん。どうしたんですか？」
「ちょっと辛くて・・・」

咲耶はあくまで笑顔。だが、明らかに無理していると真耶は感じていた。

「辛い時は泣いてもいいんですよ・・・。それが女の子の特権なんですから」

真耶の言葉に咲耶は

「ひっく・・・うわあぁぁぁぁぁぁん!!あああああああ!!」

真耶に抱き着いてしまった。

（藤堂さんも辛いんですね・・・）

こうして、それぞれの夜は明けていった。

第17話　生徒会長　登場！

信次は今日も1深夜に人で剣の修業をしていた。空風流天龍剣初代当主と言っても信次は修業をやめない。超えるべき壁はかつて、師と仰いだ最強の二槍の使い手“如月　玖音”。
仮想している相手も同じ。
「フゥー・・・」
少しばかり休憩。時間はすでに深夜1時。おそらく部屋では先日引っ越して来たアルティが寝ているだろう。シャワーと言うよりはエンゲージ能力で水を使い水浴びをする。
「へぇ～。一年最強はこんな時間まで修業してるんだ」
突然背後から声がした。振り返ると水色の髪の二年生。
「・・・・・」
信次は無言で見つめる。いや、睨む。
（コイツ、かなりできる・・・）
本能がそう告げる。殺意は感じない。
「初対面の女の子を睨むのは良くないよ。宮田信次くん」
「オレに何のようだ？」
「別に～？ただ視界入ったから見てただけだよ」
そう言うと彼女は背を向け歩きだした。
「バイバイ」
信次の見知らぬ女生徒は深夜の闇に消えた。
信次は考えながらエンゲージ能力を使い自分の真上に大きな水を召喚し、その水を被った。まだ夏日が続く。そのなかの水浴びは気持ちいい。

翌日。
ホームルームの時間を利用し今月末に行われる文化祭についての集会。
信次はあまり聞く気にもなれないが一応聞くことにした。ボイコットすれば鬼の地獄カリキュラムが待っている。
「やあ。」
壇上の上に現れたのは深夜にあった二年生。
「私が生徒会長の更識　楯無よ」
なぜか知らないが信次の体にとてつもない悪寒が走った。
「今年の文化祭は工夫を凝らし、あることをするわ。名付けて・・・
・織斑　一夏、宮田　信次　争奪戦！！」
楯無が扇子をパンッと開くと同時にスクリーンに信司と一夏の顔がでかでかと映し出される。
（・・・・厄日だ）
信次は心の中でため息をついた。

教室では文化祭でやる出し物の話し合いをしていた。
出てきた案が『織斑一夏・宮田信次とツイスター』や『織斑一夏・宮田信次とポッキー遊び』と言った。
（文化祭でやるもんじゃねぇだろ・・・）
信次はため息をついた。
「メイド喫茶はどうだ？」
突然発言したのはラウラだった。その発言に信次は目を丸くした。

そして、なぜか知らないが1首にの出し物は『ご奉仕喫茶』となった。

翌日。
信次とアルティはＩＳの訓練をしていた。と言ってもアルティにはまだ専用機がないため、リヴァイブを使って信次と模擬戦をしていた。
「で、信次はそのイスファルってのを倒すんでしょ？」
模擬戦を一時中断しアルティが聞く。
「まあな」
「エンゲージが使えるとは言っても仮に相手は闇何でしょ？」
「・・・その説明はまだできない」
信次はアルティの質問に答える事ができない。
「ふーん。いいけど。先に部屋で待ってるから」
そう言ってアルティはピットへ向かった。信次も黒龍を待機状態に戻し更衣室へ向かう。

「やあ」
更衣室では面倒な騒ぎを起こした張本人。更識楯無が待っていた。
「今日は何のようだ？」
信次は楯無を別の意味で警戒していた。
「ちょっとお姉さんに付き合ってもらえないかな？」
ミステリアスな笑みを浮かべる。
「・・・どうせ生徒会に入れとかそこらへんのことだろ？オレはそういうのには向いてないから」
キッパリと言う信次。
「そうじゃなくてあなたの実力が知りたいの」
「・・・・・やなこった。ケガすんのやだし。それにハンデが有りすぎる」

冷静な考察から答えを言う。確かに楯無は信次にＩＳを見せていない。それに信次は直感で楯無がかなり強いと感じ取っていたのである。

「じゃあ、素手で」

「は？」

楯無の言葉に信次は？マークを浮かべた。

２０分後。

武道場には信次と楯無のほかに一夏と咲耶も来ていた。

「ルールは時間無制限。どちらかが降参するまで。いい？」

楯無がルールを説明する。

「構わない」

両者とも袴姿。信次はかなり様になっている。

「信次。先輩かなり強いぞ」

「それくらいわかってる」

一夏のアドバイスに信次は軽く答えて楯無と向き合う。

「じゃあ。始め！」

咲耶の声で試合が始まった。

信次は構えてない。楯無はその信次に内心驚いていた。

（構えないの？だったら・・・！）

信次の呼吸の隙を突き古武術の奥義が一つ“無拍子”を使う。右の掌が信次の心臓部に当たったかに思えたが彼女の右手にはそんな感触がなかった。よく見ると掌底は信次に届いていなかった。いや、完全に間合いを外された。

「空風流天龍剣　影歩」

ただ技名を言う。そして、

「悪いが終わらせてもらう・・・」
楯無がハッとした瞬間、楯無の体が崩れ落ちた。
「え？」
楯無が驚く。
（彼は確か掌底を）
考えるが解らない。信次が何をしたのか
「無手之型　凪落とし」
信次は来るっと背中を向け武道場を後にした。

「さっき、信次は何したんだ？」
一夏が咲耶に聞く。
「会長との間合いを半歩下がって無拍子を避けたの。構えなかったのは信次は最初から無拍子を警戒していたから」
咲耶が説明する。
「なあ。信次の流派って何だ？」
「最強の古武剣術　流派『空風流天龍剣』。信次はその初代当主」
咲耶の説明に一夏は信次が何者なのかまた悩むことになった。

第１８話　文化祭

文化祭当日。

信次は一夏ともに燕尾服をまとい仕事をしていた。
先の一戦以来楯無は信次にあまり近ずこうとしていないらしい。というよりは一夏のＩＳの訓練に時間を割いているようだ。

「いらっしゃいませ。お嬢様」
信次はなれた手つきで仕事をこなす。
一組のご奉仕喫茶はかなり人気らしく行列がすごい。接客は先の２人の他に箒、セシリア、シャルロット、ラウラ、アルティの８人である。咲耶は部活の方の出し物の手伝いをしているらしい。

同時刻。
学園に１人の男がやってきた。スーツ姿に精悍な面立ち、赤い髪を後ろで束ねている。
「さぁて・・・祭りだ・・・」
男は狂喜の笑みをこぼした。

「信次！！これ２番テーブル！それと５番テーブルでゲーム！！」

「はいよー」
アルティの指示でテキパキと働く信次。
（案外楽しいもんだな・・・）
元の世界では学校と言うところに通っていなかった信次。こういうイベントは楽しいと感じられる。ただ、
（殺気がするんだよな～）
アルティから送られる殺気に信次は若干ビクビクしながら接客をする。
（ハウルビーストになんないでくれよ・・・）
冗談交じりの言葉を心の中でつぶやいていた。

「ふうー」
一段落して信次はコーラを一気飲みする。
「楽しかった？」
背後に悪魔が２人。咲耶とアルティである。
「・・・大変でした」
「うそよね？かなり楽しそうな顔だったわよ」
笑顔が怖いアルティ。
「宮田君。一時間ぐらい時間あるけど、回ってきたら？」
クラスのしっかり者鷹月さんが提案する。
「いいのか？」
「うん。１時間後に戻って来てね」
「わかった。アルティ、咲耶。行くか」
信次が２人を誘う。
「あ、私はいいわ」
咲耶が断る。
「え？行かないの？」
「さっきちょっと回ったから」

「そうか・・・なら、アルティ。行くか」
「うん！」
信次とアルティは教室を出て行った。
「藤堂さんは行かないの？」
鷹月さんに聞かれる。
「・・・・・邪魔しちゃ悪いでしょ・・・」

信次とアルティは2人で歩いていた。
「なんかなつかしいね。星花祭を思い出すね」
「そうだな。今回は落ちてくるなよ」
「ちょっと！なんでそんなこと思い出してんのよ！？」
「だって祭っていったらそこが思い出す」
2人で談笑しながら歩いていると
「あれって一夏じゃない？」
アルティが前を歩いている一夏と箒を見つける。
「ホントだ。どこ行くんだ？尾行すっか！」
信次の提案で2人の後を尾行する。
「そう言えば一夏って人気ものよね？どんな関係なの？」
「一夏が鈍感すぎるだけだ・・・。呆れるほどのな・・・」
「そういうコトね・・・。なんかあの5人がかわいそうに見えてきた・・・」
アルティが女の子の素直な感想を述べた。

その後、何の陰謀か知らないが一夏主演の『観客参加型劇　シンデ

レラ』を行うことになった。アリーナを使われる劇。信次とアルティは高見の見物に持ち込むことにした。
「観客参加型って何なの？」
「あの生徒会長がやりそうなことだ。まぁ、オレは一夏が殺られるのを見れればそれでいい」
「それもそうね。咲耶は？」
アルティが周りをキョロキョロする。
「たぶん、一夏狩り」
「なるほど・・・」

『昔々、あるところに・・・』
楯無のナレーションで劇が始まる。王子様の格好をした一夏が舞踏会のエリアに顔をだした瞬間
「せりゃあぁぁぁぁ！！」
中国の手裏剣“飛刀”を投げる。一夏はテーブルをひっくり返し防ぐ。そこにつかさずセシリアの狙撃が襲う。これのどこがシンデレラと言うのか疑問である。

「・・・一夏、大変ね。なんで皆あんなに元気なの？」
アルティが聞く。
「たぶん、一夏との同棲生活が賭けられてるんじゃねぇの？一夏の承諾なしに・・・・」
信次はあきれながら言う。

続いて現れたのはシャルロット。金髪とドレスがこの上なく似合っている。
「その王冠くれる？」
シャルロットの言葉に一夏が答え王冠をはずすと・・・

バリバリバリバリ！！

一夏に電撃が襲った。

若干黒焦げになった一夏を見て信次は
「あはははははは！！」
腹を抱え大爆笑している。
「笑い事じゃないでしょ・・・・・」
アルティがツッコムが
「だって、おもしれぇんだもん・・・はははははは！！」
爆笑し続ける。

そこに日本刀を持った箒とタクティカルナイフ二刀流もラウラが襲い掛かる。
「ひいぃぃぃぃ！！」
一夏の悲鳴が聞こえる。そこに
「ひっく、ひっく・・・・」
泣きながら現れた咲耶。手にはなぜか断刀“首斬り包丁”を携えている。一夏に最悪のトラウマが脳裏によみがえる。
「さ、咲耶・・・？なんで、それ持ってんの・・・？」
一夏が聞くが
「ドイツもこいつも私のこと無視して・・・虐めちゃって・・・もおぉやだあぁぁぁぁ！！一夏のばかあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
マジで斬りかかる咲耶。
「ちょっと待て！！俺がなにをしたんだよ！？」
「女に言わせるきぃ！？私の純情奪って！！処女まで奪っておいて！！このきちくうぅぅぅぅ！！！！」
「「「「「はあ！？」」」」」
その言葉に先の5人が反応。
「一夏、貴様・・・」

「うふ、うふふふふ・・・」
「あんたねぇ・・・」
「ほお・・・」
「・・・・・・」
箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロットの順である。そして、５人とも背中に阿修羅が見える。

「咲耶のやつ、完全によっぱらってやがんな・・・」
「助ける？」
「いや、この方が面白いからこのまま・・・！？」
信次が何かを感じた。
「どうしたの？」
アルティがたずねる。
「ワリィ、ちょっとトイレ・・・すぐ戻る！！」
といって信次は席を立ち走り出す。
「信次！？しょうがないなぁ・・・」
アルティは１人で劇を見るはめになった。
「まあいっか。面白いし」

信次が追う人影は第２アリーナに入った。アリーナ内にたたずむ１人の男の影。
「わざわざ。殺気でオレを誘ったんだ。なんのようだ？アリー・アル・サージェス？」
信司の前約１０メートル前に赤い髪にスーツ姿の男。アリー・アル・サージェス。
「わかってんだろ？てめぇの命をもらいに来たんだよお！！」

アルケーを展開しキリバチで襲い掛かる。信次も黒龍を展開し叢雲牙で防ぐ。サージェスはいきなり距離を取った。
「今回はてめぇのＩＳの鹵獲も仕事なんでねぇ・・・。アグリッサ！！！」
サージェスの声に反応してアルケーの下半身にカニのようなアーマーが装備される。６本の腕。それはまさしく何かを鹵獲するためのモノ。
信次は叢雲牙を構えなおす。
「さあ！おっぱじめようぜ！！楽しい戦いをなぁ！！」
サージェスの声がアリーナに響いた。
そして、最悪の対決が始まった。

第１８話　文化祭（後書き）

「お前がアルティを・・・！ぜってぇゆさねぇ！！！！」

「信次！！ダメェ！！！」

「ついに本性を見せたか！竜人！！」

信次の怒り。アルティの叫び。悪魔の笑い声。

３つが合わさりうまれるのはいったい？

次回

第１９話　黒き竜

明らかになる宮田信次の本当の姿・・・

第１９話　黒き竜

第２アリーナ。

信次とサージェスが死闘を繰り広げていた。

「ハッハー！！この程度かか！？え１？竜人さんよぉ！！」

サージェスが駆るアルケーと合体したアグリッサの戦法に信次は苦戦していた。

「コナクソ！！」

信次は本体であるサージェスに斬りかかるがキリバチによって防がれ攻められずにいた。接近戦はキリバチ。中距離はアグリッサ本体ごと回転させコマの様に回りながら攻撃、距離をとればＧＮハンドガンとファング。この戦法に信次は苦戦を強いられていた。

「オラ！！」

信次はファングを斬り瞬時加速で一気に間合いをつめる。だが、

「かかったな！！」

突然、信次の左腕に焼けるような痛みが走った。

「ぐあっ！？なんだ！？」

距離をとり左腕を見る。ＩＳの絶対防御があるのにもかかわらず信次の左腕は火傷、いやまるでグリルで焼かれたように赤くなっていた。

「終わりだ！！」

サージェスの声が響いた。

劇が終わり、襲撃者を退けた一夏と楯無は信次を探していた。

「信次くんどこだろうね？」

「さあ？酒でも飲んでんじゃないんすか？」

２人が話していると

バッシャ！！

「ぷあ！！」

「酔い、覚めた？」

アルティが咲耶に水をぶっ掛けていた。

「咲耶ちゃん大丈夫？」

楯無が聞く。咲耶は頭を抑えながら

「何とか・・・って！会長！！勝手に人の飲み物にウォッカ入れないでくださいよ！！」

「あは。ごめんね」

先の騒動の元凶がいた。

「それより信次見なかったか？」

一夏が２人に聞く。

「私たちもセシリアたちに頼んで探しているんだけど・・・」

アルティの言葉に楯無の表情が変わる。そこに

「こっちにはいませんでしたわ」

「こっちもだ」

「こっちも」

セシリア、箒、シャルロット、ラウラが合流する。

「まさか・・・。アルティちゃん。信次くんどんな顔して会場出て行ったの？」

「かなり怖い顔してましたけど・・・まさか！」

「亡国機業!!」

アルティと咲耶が同時にたどり着いた答え。

「亡国機業!?まさか!?」

一夏が頭に?マークを浮かべる。

「そう。イスファルとサージェスが所属している組織。詳しい説明は後!今は信次を探さないと!!」

咲耶が
いった瞬間

ドゴオオオン!!!!!

突然の爆発音。

「ナニ!?」

「テロ!?」

それぞれが頭によぎった言葉を言う。

「第2アリーナの方だわ!!」

楯無が走り出す。それを7人が追う。

(信次・・・無事でいて!!)

心の中でそう願うアルティであった。

８人がついた第２アリーナではすでに信次が駆る“黒龍”とサージェスのアルケー・アグリッサが死闘を繰り広げていた。

「あれは・・・アグリッサ!?」

楯無がサージェスのＩＳと合体しているカニのような装甲を見て叫ぶ。

「アグリッサ?まさか・・・」

咲耶の脳内に嫌な予感が走る。

サージェスがアグリッサの６本の装甲脚を機体ごと回転させ信次の防御を崩す。

「悪いが・・・これでサヨナラだ!!」

サージェスの声とともにアグリッサが青白く発光しその光が信次を覆った。

「ぐあああああああああああああああああああっ!!!!!!!」

信次の叫び声がアリーナ内に響き渡る。そして

「ＩＳを置いて死んじまいな！！」

サージェスが狂気の笑みを見せる。それは紛れも無い人を殺すのを厭わない笑み。そう、圧倒的な力で蹂躙する悪魔の笑み。

「信次！！」

アルティが叫ぶ。

「あああああああああっ！！こ、な、くそっ！！」

信次が青白い光の中で叢雲牙を振るう。太刀から黒い刃がサージェスに襲い掛かる。

「はっ！そんなの当たるか！？」

サージェスは体をのけ反らせ黒い刃“龍天月破”を避けるがその時微かにアグリッサの装甲脚の力が弱まった。

「今だ！」

信次は無理矢理、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使い窮地を脱する。

しかし、ダメージの限界を超えていた黒龍は強制的に解除される。信次は残った叢雲牙を支えにして立ち上がる。かなりフラフラだ。

「ガハッ！！」

信次が突然口から血を吐いた。

「なっ!?なんで血を吐くんだよ!?」

一夏が叫ぶ。他の7人も驚いている。当然だ、ＩＳの武装を基本的に操縦者に直接ダメージを与える事はできない。なのに、信次の吐血。理由は1つしかない。

「あのアグリッサって言う強化装備が原因ね・・・」

楯無は落ち着いて状況を判断しているが事態は最悪。信次は今、生と死の境にいると同じ。次にあのアグリッサの光を浴びれば確実に死ぬだろう。

「信次!!」

アルティがバリアーを叩く。だがその声は信次には届いてない。

「どうだ?アグリッサのプラズマフィールドのお味は?普通の人間なら即死のはずなんだがな。流石は世界で最も強い種族、最後の“竜人(ドラゴンスレイス)”。しかもあのリュージ・レクサリーナの血を受け継ぐだけのことはあるな」

サージェスが観客席にいる7人を見る。そして、アルティを見て笑う。

「死ぬ前に1つ教えといてやるよ。あの魔導大戦の時にてめぇの最(ラス)終契約(トエンゲージ)したあの白炎の魔女を殺したのは・・・・・・この俺だ!!」

その言葉に信次の脳裏に2人の人物の顔が浮かんだ。

1人は敵でありながら心を通わせることのできた少女　ルーシャ・レナード。

そして、彼の真のパートナーである　アルティ・ウクライナ。

その2人の最後に見た顔。そして、消えていく記憶が。

「お前がアルティを・・・・・・許さねぇ・・・ぜってぇ許さねぇぇぇぇ!!!!!!!!!!」

信次が吠えた。それはまさしく竜が吠える咆哮と同じ、大気が揺れる。そして、アリーナを覆っているバリアーまでもが振動している。

「信次ダメェ!!!!!」

アルティが叫ぶ。

その瞬間、信次の姿が変わった。体中に黒い鱗のようなモノが現れ、押尻からは竜の尻尾のようなモノ、そして、体全体が黒い竜そのモノになってしまったのだ。鋭い手足の爪、背中には翼。それはまさしく、神話に出て来る竜そのモノ。

「嘘だろ?」

「何ですの・・・」

「何が起こったのよ?」

「あれは・・・」

「ドラゴン・・・？」

一夏、セシリア、鈴、箒、シャルロット、が言葉を発する。ラウラ、楯無は今の状況がわからず言葉が出ない。

「がああああああああ！！！！」

竜化した信次が吼えた。その咆哮は憎しみを撒き散らすかのようなモノ。

「やっと本性を出したか？死ねや！！！」

サージェスがファングを射出したが

ボンボンボンボンっっっ！！

射出した８機のファングが斬り落とされた。

「なにっ！？」

驚くサージェス。そして、目の前にいきなり信次が現れる。叢雲牙にはかなり圧縮された黒いエネルギー、“龍天月破”。サージェスの顔に焦りが見える。

信次はそれを迷うことなく振り下ろす。サージェスは間一髪でアグリッサを捨て信次との距離を取る。信次が放った龍天月破の後を見て驚愕した。

（あれを食らってたら死んでたな・・・）

龍天月破の跡、完全に放たれた大地が消えていた。それをＩＳをつけてるとはいえ食らえばただでは済まない。

「信次！！！もうやめて！！！」

観客席ではアルティが叫んでいるが信次の耳には届かない。

「まだ終んねぇのか？」

「時間をかけ過ぎだよ」

空間が歪み現れたのはイスファルと黄緑色の髪の青年。２人ともすでにＩＳを展開している。

「あいつは！？」

咲耶が黄緑の髪の青年を見てはっとする。

「リボンズ・アルマーク！！！」

「さて、そろそろ退場してもらうか！！」

イスファルが二本の刀を抜き斬りかかる。サージェスもキリバチで

襲い掛かる。信次は2対1にもかかわらず互角に対峙しているがそこにGNファングと大型ビームサーベルで襲い掛かるリボンズが加わり一方的な展開となる。

「一夏!!これ壊して!!!!」

突然アルティが怒鳴る。一夏は一瞬戸惑うが

「わかった!白式!!」

百式を展開し雪片二型に零落白夜のエネルギーを集めアリーナのバリアーを叩き壊す。
それと同時に咲耶たちがそれぞれのISを展開しアリーナになだれ込む。

「おやおや?観客が乱入?でも、これでコイツは終わりだ!!」

イスファルが黒い刀“戦刀”を信次の腹部に突き刺した。

「があああああああああ!!!!」

悲痛の叫びをあげる信次。そこに

「いっちまいなぁ!!!」

サージェスのキリバチの刃が分解しファングとなり信次を串刺しにする。

「信次！！！！」

アルティが叫んだ。信次はまだなお立っている。
だが、出血多量。普通なら死んでもおかしくない量の血を流している。叢雲牙にエネルギーが集まる。そのとき

「信次！！もうやめて！！！」

アルティが信次を抱きしめた。

「！？」

「これ以上続けたら、ルーシャも私も泣いちゃうよ・・・・」

「！？オレは・・・・」

「前に言ったでしょ？憎しみは何も生まない・・・って。信次が言ったんだよ・・・」

アルティの言葉に反応して信次の竜化が解けた。

「アルティ・・・オレは・・・お前を・・・まも・・・れ」

そのまま信次は意識を失った

。

「・・・どーすんだ？」

サージェスがイスファルに聞く。

「スコールが戻ってこいだとよ。時間かけ過ぎだ。それにかなりの人数が集まってる今回はここいらが潮時だ」

イスファルの言葉に黙って頷くサージェス。リボンズも同様。

「それに、鬼人の他にも専用機がある。面倒だ・・・今回は見逃してやるよ。じゃあな」

イスファルが言うと3人は空間の歪みに消えた。

「なんだ?何があった?」

突然の声に全員驚く。

「!?宮田!?どうしんたんだ!?」

千冬はアリーナの現状と信次の状態に驚く。

「織村先生!早く手当てをしないと手遅れになります!!」

楯無が言う。

「わかった。至急宮田を医務室へ運べ!!話はそれからだ。」

千冬の言葉に従いアルティは一夏とともに信次を医務室へと運んだ。

信次は出血多量の他にアバラが3本折れ、内臓破裂3箇所という重傷だったが何とか一命をとりとめた。

第１９話　黒き竜（後書き）

次回予告。

「あなたたちにはわからないでしょ！！他人と違うモノとして生まれた者の苦しみが！！！！」

「お見せしましょう・・・宮田　信次と言う男の過去を・・・」

ついに明かされる信次の過去！戦いと悲しみを知る男の過去が明らかになる！！！

第２０話　竜の神話　―修業編―（前書き）

過去編突入！！

修業編って言っても修業の描写少ないです。

史上最強の弟子ケンイチの修業風景を思い出してください。

第２０話　竜の神話　―修業編―

ＩＳ学園。医務室。

信次は肋骨が３本骨折、内臓破裂数ヶ所、出血多量という重症で運ばれた。

「普通なら死んでもおかしくないケガだそうだ」

千冬が信次の状態を端的に説明する。信次は集中治療室で現在治療を受けている。呼吸が荒く瀕死の状態。

「信次・・・」

アルティが窓越しに信次を見る。見るからに来るしそうだ。

「失礼します」

真耶が入って来た。

「山田先生。どうでしたか?あの強化パーツは」

「はい。藤堂さんと更識さんの言う通り、プラズマフィールドを搭載した特殊なパーツでした」

「プラズマフィールド?」

一夏が聞く。

「簡単に言えば電子レンジみたいなモノ。特殊な波長を使ってＩＳの絶対防御を突破して操縦者に直接ダメージを与えることが可能なの」

咲耶が説明する。

「はい。藤堂さんの言う通りです。ただ、宮田くんはそれを長時間受けていたんですよね？だったら普通なら即死のはずなんですよ・・・」

「どういう意味なの？」

鈴が聞く。

「簡単です。あのアグリッサは操縦者を殺害し、ＩＳ本体を強奪するためのモノです。つまり・・・」

「あのサージェスという男は宮田を殺すつもりだったのだろうな」

『っ！！』

全員が言葉を失う。そして、サージェスのあの顔を思い出す。人を殺すのを厭わない笑みを・・・。

「あと、こっちの方が問題なんです」

真耶が新しい資料を取り出す。

「どうなさったんですか？」

「宮田の体組織を調べるために血液検査をしましたら・・・人間には存在しない細胞が多数検出されました」

「「っ！！」」

真耶の言葉にアルティと咲耶が反応する。

「それとすでにほとんどのケガが治りかけているんです」

「・・・・・ウクライナ、藤堂。話してもらおうか？」

千冬が2人を見る。

「・・・アルティ」

「話を聞いてどうするんですか？」

アルティが体を震わせながら聞く。

「信次のことなんだぞ！話した方が良いって」

一夏が言った瞬間

「あなたたちに何がわかるの！？人と違うものに生まれた者の苦しみが！？」

アルティが怒鳴った。

「確かに話せるけどね・・・でも信次のことは特別なの・・・話せないんだよ・・・」

咲耶も続く。

「話すべきです」

医務室内に突然声が響いた。

「誰だ!?」

千冬が臨戦態勢に入る。

突如空間が歪み現れたのは蒼い髪に背中に翼を生やした天使。

全員が驚く。

「話すべきですよ・・・彼の過去を」

天使がアルティと咲耶に言う。

「でも!?」

「わかっているでしょう。イスファル、サージェス、リボンズを倒すためには必要なことです」

天使の言葉に2人は黙って頷いた。

「話の途中いいか?何者だ?」

「私はこの3人をこの世界に送り込んだ者です・・・・あなた方の言葉では“天使”と言ったほうが通じますね」

天使は信次を見る。

「あの～・・・違う世界ってどういう意味？」

シャルロットが聞く。

「私たちはこの違う世界、違う次元って言った方がいいかな？そこから来たの？」

咲耶の説明に一夏、鈴、箒は？マークを浮かべる。

「ＳＦ映画であるでしょ？平行世界って、そのこと」

アルティが付け加える。

「じゃあ、３人とも異次元人ってこと？」

鈴が聞く。

「解釈はそれで間違ってはありません。私はイスファル、サージェス、リボンズの脅威がこの世界にあると知り、その対抗策として・・・」

「３人を送り込んだ・・・ということか」ラウラが答える。

「確かに異次元人ってことはわかるけど・・・信次くんは何者なの？あの戦闘の時のあの姿は・・・」

楯無の言葉に全員が信次とサージェス、イスファル、リボンズとの戦闘時の信次の姿を思い出す。

「“竜”だったよな・・・」

一夏がポツリと呟いた。

「では、そのことも含めた彼の過去を見せましょう・・・・」

「見せるって!?どうやって?」

一夏が聞く。

「彼の記憶とほかの記憶を見せます・・・」

天使の手に蒼い球体ができ

パアアアアーーーー!!

それが弾けた。

12人はとある公園にいた。

「これは・・・」

千冬が周りを見る。公園の木の上に幼稚園児ぐらいの子供が座って

いた。

「あれって・・・信次？」

「これは彼の記憶の中・・・いわば、バーチャル空間です」

天使が説明する。

「私たちの世界は一夏たちの世界とは法則が違ったの・・・“魔法”が存在していたの」

「魔法！？」

アルティの言葉に鈴が驚く。

「魔法って言ってもそんなに良いものではなかったわよ・・・そのせいで戦争とかがあったから・・・」

「戦争ですか・・・」

真耶が繰り返す。

「過去に何度もね・・・。そして、この世界にはある法則があった・・・」

「ある法則？」

咲耶の言葉にシャルロットが聞く。

「“人が死ぬと粒子になる”って言う法則がね」

「粒子って・・・どういう意味なのですか?」

セシリアが聞く。

「この世界の魔法はね、自分の魔力と大気中の魔力“マナ”をあわせて発動するの。つまりね・・・この世界で死ぬと人間が消えちゃうの・・・」

「っ!?」

全員が驚く。

「私も咲耶も信次もそれを体験してるから・・・」

「それって・・・まさか!?」

箒が気づく。

「私たち3人はこの世界じゃ死んだの・・・」

アルティの言葉にみんな言葉を失った。

「でも、今は生きてるから大丈夫!さっ!見よう」

「彼は幼い時から人とは違うという理由で迫害を受けていました」

「なんで?」

鈴が聞く。

「人間って自分とは違うものに対してひどく忌み嫌う生き物でしょ？信次は竜人だったから、ほかの子たちよりも力が強くかったのだから・・・・」

「忌み嫌われる存在だったと・・・」

咲耶の言葉に千冬が付け加える。

「だが、そんな彼に1人の親友ができました」

信次の木のところに1人の子供が来た。

？？？『何してんだ？』

信次『木登り』

無愛想に答える幼い信次。

准『俺、姫矢　准。遊ぼう！！』

准の言葉に頷いた信次は准と遊んでいた。

「彼が信次くんにとっての初めての友達でした。彼は信次くんのことをバケモノとは呼びませんでした」

「だから、信用していた」

「はい。そして、彼がらが5歳の時に信次くんの母桔梗さんが亡くなると彼は准くんの家に居候することになったんです」

「え?じゃあ、信次のお父さんは?」

シャルロットが聞く。

「すでに他界してたらしいよ。確証はないけど」

咲耶が答える。

「それはおいおいわかりますから。で、彼が１４歳の時に人生のターニングポイントがやって来たのです」

信次と准はなぜか暴力団の構成員に追われていた。

准『たくっ!なにやってんだよ!!』

信次『知らん!向こうが勝手にしこたま応援呼んだんだよ!!』

准『呼ばれるようなことをするな!!で、どうする?』

信次『後で飯食い放題ってのはどうだ?』

准『乗った!!』

２人は振り向き暴力団構成員を殴り飛ばしていく。

信次『オラオラ!!』

准『食らえ!!』

およそ15分後。構成員全員をのした2人はジュースを飲んでいた。

信次『どこに食いにいく?』

准『焼鳥屋でいいんじゃないか?あそこなら安いし』

2人はそう言いながら構成員の財布を買ってに拝借している。

「あれって・・・犯罪よね?」

鈴が聞く。

「ああ・・・だが、あいつら、手慣れているぞ」

箒が言う。

「あの2人はそういうのが当たり前だったらしいよ」

咲耶が簡単に説明する。

そんな中、2人の背後に2人の男が現れた。

???『やれやれ、最近鬼が暴れてるって聞いたから来てみれば、まだガキだな』

背中に刀を差して黒髪の男が信次、准の頭を叩く。突然のことで2人は距離をとる。

？？？『でも、２人ともかなりの魔力を持ってる。あと、レクサリーナの血をやっと見つけたよ』

その後ろから１５、６歳の白髪の少年が姿を表す。

信次『誰だ！？』

信次と准が臨戦態勢に入る。

ケイオス『僕はケイオス。君達２人に用があって来たんだ』

東条『俺は東条英虎。十三隊の八番隊隊長だ。あんまり手荒なことはしたくないんだ。とっととついて来い』

信次『そう言われて、ハイそうですかって。言うかよ！！』

信次が英虎に廻し蹴りをするが

英虎『その程度じゃ・・・俺に勝てるわけないだろ？』

左腕一本で防がれてしまう。

信次『なっ！？』

そして、

英虎『終わりだ』

後頭部に手刀をくらい気を失う信次。

ケイオス『どうする?姫矢准くん』

ケイオスの言葉に准は従うしかなかった。

「強すぎじゃないのあの人・・・」

楯無が素直な感想を述べる。

「つーか!信次の実年齢何歳だよ!?」

一夏が聞く。

「私たち3人とも本当は20代よ」

アルティが自分たちの実年齢を迷うことなく言う。

「あの東条という方が言った十三隊とはなんですか?」

セシリアが聞く。

「十三隊は政府の傭兵部隊的なモノ。でも、彼らの代は隊長クラスの実力者が少なく低迷してましたが。初代の代はかなりの実力者たちが揃っておりました」

天使が説明する。

「宮田くんはどうなったんですか?」

真耶が聞く。

「あの2人は十三隊の隊長4人と仙人から修業を受けることになりました」

「4人と仙人？」

「あの時の十三隊の隊長格と見ればわかるよ」

場面が信次が修業の場面になる。それは

信次『うわあああ！！人殺しぃぃ！！』

玖音『早くしねぇと食われるぞー』

なぜかトラに追われている信次。手足には重りが多数。

「何・・・あれ？」

鈴が言う。

「あれが修業らしいわよ・・・」

アルティが簡単に説明する。

「彼は一番隊隊長の如月玖音から剣の修業、ケイオスから柔術と様々な技を学びました。准くんは八番隊隊長の東条英虎から彼特有の鬼道を学んでいました」

「まあ、あんな修業すれば強くなるか・・・」

一夏がポツリと言った。

「それから1年後。彼らが戦いの中へ身を置くきっかけが起こりました」

「きっかけ？」

「邪神と呼ばれるモノとの死闘が始まったのです」

第２０話　竜の神話　―修業編―（後書き）

次回予告。

すべてを破壊つくさんとする邪神イリス。６人は命を懸ける。

そこで１つの命が散る・・・

次話　邪神編。

第２０話　竜の神話　―邪神編―

「邪神とは一体なんですの？」

先ほどの天使の言葉にセシリアが疑問を持つ。

「私たちの世界は過去の遺物が数多く存在してたの。約１万年からのがね」

「そのなかに目覚めてはならないモノが目覚めてしまったのです。それが邪神イリスだったのです」

アルティと天使が説明する。

十三隊の玖音、英虎、ケイオス、信次、准、玖音の弟子の橘　嵐はお頭武田　龍剣から京都へ向かえと言われ６人は京都の十三隊の拠点『京都守護府』へ向かった。

玖音『・・・１０歳以来か・・・』

６人が本殿に入るとそこの長近衛　詠春が彼らを待っていた。

近衛『久しぶりです。玖音くん・・・』

玖音『ええ・・・もう１０年ぶりですかね・・・』

近衛『さあ、中へお呼びした理由を話しましょう』

「当時の日本では怪奇現象が続出していました」

「怪奇現象？」

一夏が？マークを浮かべる。

「日本っていうか世界規模でね」

アルティが付け加える。

「それって魔法が関係しているから？」

シャルロットが聞く。

「それだと半分正解。ちょっと前にも説明した通りこの世界には魔法と1万年前からの古代遺跡があったの。それは古代からの最悪の遺物・・・。太古の科学やら魔法やらね」

アルティが説明する。

「それにそれを狙って起きた戦争とかもあったしね」

咲耶が付け加える。

「で、邪神っていったいなんだ？」

一夏が聞く。

「・・・人間が作り出した破滅を呼ぶモノ。それを根源的破滅招来体と呼んでいました」

嵐を守護府に置いた5人は近衛から依頼で奈良の守部一族のいる村へ向かっていた。

英虎『たくっ。最近の世界はどうなってんだ?魔獣、ハウルビーストの出現・・・。それに伴う各国の軍備の増強。きりがないな』

車を運転しながらぼやく。

信次『で、守部一族の柳西張だっけか?どんなとこなんだ?』

玖音『俺も詳しくは知らないがそこには世界を滅ぼすモノがあるって聞いたことがある』

信次『世界を滅ぼすモノ?』

ケイオス『まあ。向こうに着けば分かるでしょ?』

そうして一行は守部一族の村　南飛鳥村についた。

玖音『えーっと・・・こっちか?』

5人は迷っていた。

准『師匠。まさか・・・』

英虎『みなまで言うな・・・迷ってんだから』

一行がいるのは山の森。とりあえず人が歩けるようにはしてあるがこれは人が迷う道だ。

信次『・・・なんか感じないか?』

ケイオス『どうしたの?』

信次『なんか悪意って、いうか憎しみのような魔力を感じる』

玖音『ん?誰だあれ』

玖音が人を見つけた。セーラー服を着た中学生ほどの少女がいた。少女はこちらをすごい眼で睨んでいる。そしてどこかへ行ってしまった。

英虎『なんだあの子?』

ケイオス『さあ?で、いつまでそこにいるの?』

ケイオスが草原にいた中学生ほどの男の子を見つけた。彼が守部一族の長男のようだ。彼の案内で5人は守部の家についた。そこで一族の長から柳西張の話しを聞くことになった。

長『柳西張にはある岩がある』

信次『岩？』

玖音『話しを最後まで聞け』

ゴチンと頭を叩かれる信次。

長『それは力自慢４人が抜こうとしたがびくともしなかったという伝説が残っている』

ケイオス『もしその岩が動いたらどうなるんですか？』

長『世界を滅亡させるなにかが甦ると言われている』

玖音『とりあえず嵐の調査とさっきの話しで柳西張には厄介でモノがいるって、ことぐらいか』

英虎『それだけじゃ漠然としすぎてるな。もっと手がかりはないのか？』

５人はご飯をご馳走になりながら今後の方針について話し合っていた。

信次『まさかイクシア時代のモノとか？』

ケイオス『ありえなくはないと思うよ。現にあの頃の時代の軍事技術は今の技術よりもすごかったって、話しだし』

玖音『とりあえず。明日にそこを調査するか・・・って、あいつは』

玖音が急いで家を出ていく長男の竜也を見つけた。

英虎『なんかありそうだな・・・准はここに残ってろ』

４人は竜也を追う。かなり焦っているようだ。そして、とある洞窟のようなところについた。

そこは何かの祠のような洞窟。４人は中から何かどす黒い魔力を感じていた。信次は当時の愛刀　鉄砕牙を解放させた。

玖音『うしっ！入るぞ！』

４人は一斉に祠に入って行く。そこには夕飯の前にあった少女が何かの繭にいた。それを竜也が何とか取り出そうとしていた。

英虎『なんかまずいぞ！！』

４人は繭を切り裂き少女を助け出した。そして、出る時、繭の中にいるナニカ（・・・）を警戒していた。

「なんだあれは？」

ラウラが聞く。

「あれが邪神です。憎しみを吸い、彼女と同化しようとしていました」

「同化だと？いったい何のために？」

千冬が聞く。

『それはすぐにわかります』

少女皆川　舞を救急車で運ばせたあと英虎が祠を中心に半径1キロの結界を張った。

英虎『これで2、3日は大丈夫なはずだ』

玖音『そうか。俺とケイオスはこっちに残る。お前ら3人はあの子を頼む』

英虎『了解。信次、准！行くぞ』

3人は京都守護府の嵐と合流し皆川の警護をしていたが謎の男　倉田真也にどこかに連れてかれてしまった。それと同時に奈良の祠にいたナニカが巨大な怪獣となった。

4人は倉田に案内され皆川のいる神社にやって来た。

英虎『彼女をどうするつもりだ！？』

倉田『奈良の巨大生物はこの時を待っていた。イクシア時代からの憎しみを抱いてね』

英虎『御託はいい！彼女を東京のうちのじじいのところに運ぶ！』

４人は皆川と倉田を連れて京都駅に来たが台風の影響で電車は動かない。それとケイオスから連絡があり奈良の巨大生物が動き玖音が九尾化して追ったと連絡が入った。

玖音と邪神が空中で戦っていると皆川の息遣いが荒くなってきた。

信次『近づいてきてるんじゃないか？』

倉田『あの邪神はこの子と同化して完全体になろうとしている』

准『何のために？仇を討つためか？』

倉田『違う。根源的破滅招来体はイクシア時代に現れたモノだ。それは腐敗した人類をリセットするために。どんなに厄災の魔獣と人類がどうにかしようと不可能だ』

倉田が自慢するように言う。

英虎『だが、人類は最後の瞬間まで生きようとする。それはいつの時代でも同じだ！』

残りの３人も黙って頷く。

皆川『来た・・・！』

突然走り出した皆川。

嵐『おい！？ちょっと待て！！』

４人もそれを追う。彼女は展望台まで走った。展望台から空より降臨した邪神イリスが見えた。

信次『でかい・・・』

推定５０メートルはある。そこに九尾化した玖音が立ち塞がる。

九尾『ぐがあああああ！！』

九尾がイリスに襲い掛かる。鋭い爪で切り裂くが効果が無い。逆に押され始める。

皆川『イリス・・・』

突然呟いた。そして、

皆川『イリス・・・殺して！！』

彼女の声に応えるかのようにイリスが九尾の腹に触手を突き刺した。鮮血が飛び散る。

「！？」

見ていた全員が眼をそむけたり、眼を覆ったりする。

英虎『玖音！！このやろう！！』

自身の刀“影討ち”を解放して立ち向かう。

信次『風乱閃！！』

信次も鉄砕牙の得意技でイリスに斬り掛かるが全くきいていない。逆に触手によって弾き飛ばされてしまう。英虎は地面に叩きつけられ右腕と左足があらぬ方向に曲がり。信次は駅内の建物に叩きつけられ瓦礫の下敷きになり。玖音は腹部のキズで倒れ、准と嵐も瓦礫の下敷きになってしまった。途中ケイオスが援護したが5人同様にたたかれてしまう。

そして、イリスが皆川を取り込んでしまった。

信次『くそ！どうすれば・・・』

玖音『あきらめるな！！』

玖音の声とともに九尾化した玖音の右手がイリスの腹部。皆川が取り込まれた場所を貫いた。そして、そこから皆川を救い出すが

イリス『ギュアあああ！！』

怒りとともに玖音の腹部を貫いた。

玖音『グア・・・』

九尾化を強制的に解かれる。
イリスの足音が終焉の音のように聞こえる。

英虎『・・・やるか』

英虎がゆっくり立ち上がった。だが出血多量、に肋骨が骨折していて内臓破裂数ヵ所。できる手はない。

信次『英虎さん・・・』

英虎『姫矢　准。俺はお前に鬼道のすべてを教えた。今から最後の技を見せる』

英虎は5人を見て微笑み、周囲に結界を張った。

玖音『英虎よせ！！』

英虎『第八十七代目　“斬罪の使徒”　東条　英虎・・・。最後の技だ』

英虎とイリスの間に魔力が集まっていく。

英虎『“天の月　大地の業火　月は欠け　涙を流す　還ること無し　闇の中へ　誘い散っていく”
・・・お前らといた時間悪くなかったぜ・・・。
“破道終式　無月”！！』

その技を放つ。空間が歪みイリスが吸い込まれていく。

破道終式　無月。術者の指定した空間を消滅させる“斬罪の使徒”の最終奥義。

イリス『ギェえええェェ！！』

イリスは空間に吸い込まれ消滅した。

それと同時に英虎は倒れた。その体は灰色の粒子になりつつある。

玖音『英虎！！起きろよ！！』

だが、英虎は起きない。体は徐々に消えていく。

信次『英虎さん！！』

准『師匠！！』

玖音『起きろよ！！帰ってスナック連れてくんだろ！？弟子2人と行くんだろ！？起きろよ！！英虎！！英虎ーーーー！！』

雨の中、玖音の叫び声が響き渡った。十三隊八番隊隊長　東条　英虎。彼は壮絶な戦いの後にもかかわらずその最後の顔は微笑んでいた。

「これがこの世界の掟なの」

「人が死んだら粒子になる世界ということか・・・何も残らず散っ

ていくのか・・・」

千冬が呟いた。

「ハイ・・・」

「でも、なぜあの人は微笑んでいたのですか?死ぬというのに」

セシリアが聞く。

「それは、これからわかります」

景色が信次、准、ケイオスの3人が新幹線に乗って帰っている場所になった。

信次『なんで英虎さんはあんなに安らかな顔だったんだ?』

ケイオス『たぶん、悔いがなかったからじゃないかな?』

准『どういう意味だ?』

ケイオス『人間は自分にとって”大切なモノを守れたりしたら笑って逝ける”って昔友人から聞いたことがある。英虎はそれができたから笑っていたんじゃないかな?』

信次『よくわかんねぇ・・・』

准『俺も』

ケイオス『いつかわかる時がくるよ・・・2人にもね』

ケイオスが微笑んだ。

「俺にもよくわかんねぇ」

一夏が言った。

「普通に過ごしてたらわかりませんよそれは・・・。これが原因で世界のバランスが崩れてしまいました」

「じゃあ、あの化け物が大量発生したの!?」

「いえ、太古より眠っていた生物、悪魔たちが目覚めました。ですが、イリスほどではありませんけど。彼らはその退治をすることになりました。そして、信次くんの初恋の相手に会うことになったのです」

第２０話　竜の神話　―邪神編―（後書き）

次回予告

「きみは？」

「ルーシャ・・・」

なぞの少女と出会った信次。だが、それが悲劇の幕開けだった。

次回　竜の神話　―竜の目覚め編―

「失敗作はいらねぇ・・・」

「緒方ぁぁぁぁぁぁ！！」

暗闇に響き渡るのはいったい・・・

第２０話　竜の神話　―初恋編―

「信次の初恋の相手？それってアルティじゃないの？」

シャルロットが聞く。

「ううん。私と信次が会ったのはもうちょっと後」

「信次くんはイリスとの戦い後、かなりの実力をつけました」

「なんで？」

鈴が聞く。

「それは後で本人に聞いてください。それにより信次くんは地下闘技場で修業をすることになりました」

「地下闘技場？」

真耶が聞く。

「簡単に言えば野蛮な賭け試合です」

景色が地下闘技場になる。リングの上にいるのは信次と2メートルはある大男。

大男『うおぉぉりゃあぁぁぁ！！』

大男は力任せに信次に襲い掛かるが突然信次が空中へ

信次『空風流天龍剣　無手之型　龍乱脚！！』

高速の脚技が大男にヒットする。そして大男は糸が切れた人形のように倒れた。

「まさか、信次の修業って、・・・」

「簡単に言うと実戦経験を積むっ訳」

咲耶が説明する。

「そして、とある日に会ったのです。彼の初恋の相手ルーシャ・レナードと」

信次は地下闘技場に行く前にとある岬に来ていた。夕暮れ時のため、海が茜色に染まっている。

信次『さて、今日も・・・って、人？』

信次は岬の先にいる少女を見つけた。当時１７歳の信次は興味を持った。そして、その少女に近づいていった。

少女『♪♪～♪ーー♪ーー♪♪～♪♪』

金髪の少女は鼻歌を歌いながら独創的な踊りを踊っていた。その鼻歌は信次の母がよく歌っていた子守唄によく似ていて信次の心を安らかにしてくれた。

信次（いい唄だな・・・）

信次は修業のことを忘れて少女に見入っていた。

だが、少女は足を踏み外し岬から落ちてしまった。

少女『キャアアア！！』

信次『クソッタレ！！』

信次は少女を空中で抱きしめそのまま海へ

ドッボーーーン！！

盛大な水しぶきをあげた。少女『私、死んじゃうの？いや・・・死ぬのはいやっ！！』

パニックになって暴れだす少女。その時信次は彼女を優しく抱きし

めた。

信次『大丈夫。オレが守るから』

その言葉に落ちついたのか。少女は信次の胸の中に頭を丸めた。

その後、信次は1人暮らししている1DKのアパートに彼女を連れてシャワーを浴びさせた。
2人ともシャワーを浴びた後

信次『オレは宮田信次。君は?』

ルーシャ『ルーシャ、ルーシャ・レナード』

信次『じゃあ、ルーシャ。君の家族とかは?』

ルーシャ『明日まで別行動中』

信次『じゃあどうするの?』

ルーシャ『ここに泊まる。あと、お腹減った』

と言ってルーシャは盛大に腹の虫を鳴らした。

信次『・・・デリバリーでいい?』

ルーシャ『うん!!』

ルーシャは頷いてメニューを見る。それはまるで子供のようだった。

信次は冷蔵庫からビールを取り出しそれを飲んでいる。

「おい・・・あいつあの時何歳だ？」

千冬がどす黒いオーラを出しながら聞く。

「たぶん17歳ぐらいだよね？」

「うん」

咲耶とアルティが言う。

「彼は師匠の影響もありしょっちゅう飲酒をしてました」

天使が冷静に説明する。

「じゃあ、私達の世界と法律が違うの？」

楯無が聞く。

「いや、ほとんど同じだよ。ただ、信次が育った場所が特別なだけ」

「つーか・・・あのルーシャって子。食い過ぎだろ・・・」

一夏がルーシャの食欲を見て驚く。彼女はピザ5枚、ラーメン3杯、ジャンボ餃子7コ、仕舞いには寿司を物凄い勢いで食べている。普

通の女の子が食べる量ではない。

「その後、ちょっとしたことが起きました」

時刻は夜の１１時を過ぎた頃。信次は布団を敷いたが布団は１枚しかない。信次はしょうがないと思い床で寝ようとすると

ルーシャ『どこで寝るの？』

信次『ルーシャは布団で寝ていいぞ。オレは畳で寝るから』

ルーシャ『え～～！？一緒に寝ようよ！！』

その言葉に信次は

信次『そういうことは女の子は言っちゃダメなの！！』

顔を真っ赤にして言った。するとルーシャは小悪魔的な笑みを浮かべ

ルーシャ『ねーねー。童貞？そうなんでしょ～～？』

信次は顔を背けている。

ルーシャ『信次？』

信次『へ？』

急に呼ばれ信次がルーシャのほうを見た瞬間、信次の口はルーシャによってふさがれた。簡単に言うと信次はキスされたのである。そして、信次を布団に押し倒した。

信次『ぷあ・・・あのルーシャ？』

ルーシャ『エへへ～～♪いいよね？』

「飛ばしましょう」

天使はいきなり景色を真っ白にした。

『あ・・・』

何人の声が重なった。

アルティと咲耶は普通に見ていたが真耶は顔を真っ赤にして視線をそらし、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、楯無は続きが気になっているらしい、千冬は手で頭を押さえてはいるが顔を赤くしている。

「今のあなた達の教育上よくありませんしね」

天使は再び景色を造りだした。

翌朝。信次が起きると右側にルーシャが一糸纏わぬ姿で寝ていた。
それを見た信次は

信次『何やってんだろう・・・オレ・・・』

自己嫌悪に陥っていた。今日は学校だが行く気なれない。時刻は9時。学校はもう始まっている。とりあえず准に今日は行けないとメールし服を来て水を飲む。するとルーシャが目を覚ましいきなり信次に抱き着いた。

信次『ちょっ!?ルーシャ!?』

ルーシャ『エヘヘ♪♪』

今度は信次の顔をに手を当て

ルーシャ『おはよう♪』

信次『お、おはよう・・・』

それから2人は軽く朝食を食べ家を出た。途中までルーシャを送ると

ルーシャ『ここまででいいよ。ありがとね』

信次『ああ。気をつけてな』

ルーシャ『信次♪♪』

と言ってルーシャは信次にキスをした。

ルーシャ『愛してるよ！またね♪』

そう言うと駆け出して行った。その時信次は何も言えなかった。

信次はトボトボ歩きながら玖音達のいる十三隊の本拠地“晃顕寺”に帰って来た。中では玖音とケイオスが信次と同い年ぐらいの少女吹石　凌と嵐に稽古をつけていた。

玖音『なんだ信次じゃねぇか？学校はどうした？』

信次『今日は休む・・・』

ケイオス『そういえば・・・信次、昨日地下闘技場行ってないでしょ？どうしたの？』

信次『・・・イロイロあった・・・』

本当のことを言えるに言えない。

玖音『さては・・・おめぇ、始めて会った女の子家に連れ込んでそのまま〇〇〇したのか？』

図星だったため何も言えない信次。

ケイオス『ホント？』

嵐『玖音。〇〇〇ってなに？』

１３の嵐は○○○を知らない。そのため師匠に聞く。

凌『○○○って言うのは・・・』

玖音『女の子が説明すんな!!』

嵐『じゃあ、玖音』

嵐が純粋に聞いてくるが

玖音『いや・・・何って言われてもな!俺だって経験ないし・・・』

ケイオス『まさか玖音って・・・』

玖音『言うな!!それ以上言ったらお前でも、殺す!!』

必死の玖音。信次は勝手に混乱した場を去った。

そして、寺の屋根に登り１人物思いに耽っている信次。そこに

ケイオス『どうしたの?信次らしくないね』

信次『なぁ・・・ケイオスは何千年って生きて来たんだろ?』

ケイオス『まあね』

信次『恋って、愛ってなんだろうな・・・』

ケイオス『ぷっ!アハハハハハハ!!』

腹を抱えて笑い出したケイオス。

信次『なっ！？笑うなよ！！』

ケイオス『ゴメンゴメン。その質問が信次からくるなんて思ってなかったから。まあ、わからなくもないよ。で、会って初めての人に恋でもしちゃったの？』

信次『恋っていうか・・・しちゃった。から、その・・・』

ケイオス『僕はねそれも恋だと思うよ。人が恋をする理由はねきっとその人とまた会いたかったり、信頼したいから・・・。僕もそうだったから』

信次『ケイオスの初恋って？』

ケイオス『・・・・・・・』

ケイオスは遠い目した。

ケイオス『でも、信次はまた会えるんじゃないかな？なんかそんな気がする』

信次『・・・なんか、オレもそう思う』

信次は立ち上がり屋根から飛び降りる。

ケイオス『信次！人は光と闇。両方の仮面を持ってる。大切なことはその２つの存在を認めることだよ』

ケイオスの言葉を信次はあまり理解できなかったがしっかりと頷いた。

「ねえ。あのケイオスって、人何歳なの？」

鈴が聞く。

「彼は人類を監視する監視者でした。年齢は約１万歳です」

「い、１万歳!?そんな人がいるんですか!?」

真耶が驚く。

「魔法があるからなんでもありなのよね・・・」

「その後、謎の武闘集団“闇”との戦いが始まりました。そして、彼女と最悪の形で再開することになりました」

闇。武を極めた達人達の集団。その期限は古く戦国時代にまでさかのぼる。第二次世界大戦より活人武術を目指した十三隊と違い“闇”は殺人武術を追求してきた。その相反する者たちが激突したので

ある。

玖音『いやぁ～・・・この展開は久しぶりだな・・・』

ケイオス『傭兵の時こんな状況だったの?』

2人は敵の罠にはまり、周りには達人級が200人。これはこの2人とて抜け出すのは時間がかかる。

ケイオス『これだと信次達にも敵いるよね・・・』

玖音『ああ。こっちは幹部9人の内6人は倒して、今こっちに2人いるから・・・』

ケイオス『向こうには一影　緒方一神斎。早くしないと・・・!!』

玖音『ああ・・・嫌な予感がする。とっとと片付けるぞ!!』

ケイオス『了解!』

一方、信次、准、嵐、凌はそれぞれ孤立して戦っていた。

信次『・・・女か・・・。女相手じゃ戦う気はないんだが・・・』

と言いながら鉄砕牙を構える。

女『・・・・・・』

前にいるのは黒いフードに身を包んだ女。彼女も二本の刀を構える。
刀は小刀と刀の間の長さ。間合いが取りにくい。

女が信次に躍りかかる。空中で舞うように体を回転させて襲い掛かる。

信次『よっと・・・!!』

それを防ぐが女はさらに体を回転させ防御を崩そうとするが

信次『甘い!!』

力任せに鉄砕牙を振りそれを防ぐ。信次は一旦距離を取り構え直す。
信次は自分の空間、いわゆるパーソナルスペースに入った敵を打ち落とす“制空圏”を形成する。信次はあくまでも彼女を無傷で捕えようとしていた。

女『静の極み“流水制空圏”・・・。その年齢で極めているなんて・・・。貴方はすごいね』

信次『!?その声・・・まさかルーシャなのか!?』

その言葉に女はフードをとる。そこには信次と一晩過ごしたルーシャ・レナードがいた。

信次『お前・・・闇なのか・・・』

ルーシャ『そう。私は闇の一影九拳が1人緒方一神斎の一番弟子よ』

そう言ってルーシャは刀を構える。

信次『オレ達が戦う理由はない!!なぜ戦うんだ!?』

ルーシャ『それが私の存在理由・・・』

そう信次に襲い掛かる。信次はルーシャの猛攻をただ防ぐだけであった。

ルーシャ『私たちはあなた達みたいにただ武術してるわけでわない・・・武術は人を殺めるためにある!それが武術の真髄!!』

ガシッ!!!

ルーシャ『!?』

信次は彼女の渾身の一撃を左腕一本で止めた。

信次『オレ達はただ武術をやってるわけじゃない・・・オレ達は自分の信念を貫き通すため、強くなって誰かを護れるためにやっているんだ!!』

ルーシャ『綺麗事を!!』

再びルーシャは猛攻を仕掛ける。今度は信次もそれを迎え撃つ。

信次『綺麗事でもいい!!誰になんと言われようがオレは誰かを守るために剣を振るう!!』

ルーシャ『・・・!!剣は武器!剣術は殺人術!!それでは人を守ることはできない!!』

信次『たとえそうだとしてもオレはあきらめない！！』

信次がルーシャの刀を流し柔術で彼女を投げた。そして、関節技を決める。

信次『降参しろ！！』

ルーシャ『毎日笑ってるやつらなんかに・・・！！』

その言葉に信次は違和感を感じた。思えばこれまでの戦いの中でもそうであった。ルーシャは信次を覚えていない。むしろ信次とあった記憶がないようだ。

信次『ルーシャ、お前まさか・・・エクステンデットか』

ルーシャ『そうよ、私はエクステンデット・・・強化人間よ！！』

信次（だから記憶を操作されたのか・・・）

准『信次！！』

准、嵐、凌はそれぞれの敵を倒し終え信次の加勢に来た。

信次『手ぇだすな！！これはオレの戦いだ』

そのときルーシャが一瞬の隙をつき信次の関節技をはずし信次ののど下に刀を向けた。だが、刺せない。

信次『・・・・・・』

ルーシャ『なんで!?何でなの!?殺せない・・・』

彼女は泣いていた。信次は刀を下げルーシャを優しく抱きしめた。

信次『お前は優しいんだ・・・そんなお前が人を殺せるはずがない・・・』

ルーシャ『シンジ・・・信次?』

信次『言ったろ?オレがお前を守るって・・・』

その言葉が奇跡を生んだ。ルーシャの記憶を蘇らせたのだ。

ルーシャ『うん。ありがとう・・・』

だが、ルーシャが信次から離れた瞬間。

???『・・・失敗作が!!貴様などいらん!!』

何者かがルーシャの心臓を一突きした。

ルーシャ『一影さま・・・』

ルーシャが倒れた。

信次『ルーシャ!!』

ルーシャ『信次・・・ゴメンね・・・一緒に遊びたかった・・・』

ルーシャの体が黄色の粒子になり消えつつある。

ルーシャ『また会えたら・・・また一緒に・・・』

信次『・・・ああ、また会える!!絶対だ!!』

ルーシャは最後の力を振り絞り信次の唇に自分の唇を重ねた。そして、信次が見たことない笑顔を見せた。
そして、淡い緑の粒子となって消えた・・・。

男『さて、残りは雑魚が4人と隊長が2人。余裕だな』

男は闇の一影九拳の緒方一神斎。冷酷無比な殺し屋である。

信次『・・・・黙れよ・・・・』

緒方『ああ?小僧、口の利き方に気をつけろ。俺はさっきの失敗作とは次元がちが・・・・!?』

その瞬間、緒方が吹っ飛ばされた。

緒方『なに!?何だこの魔力の量は!?』

信次の体から魔力が溢れている。信次の魔力属性は元々“無”。無は個人よってその力を変化する。准の鬼道がいい例である。信次は魔法が使えるわけではない。むしろ使えない人間であるが母桔梗から受け継いだ魔力量は常人の数十倍はあると言われている。そして、今までは最低限の量しか使っていなかった。その魔力が怒りにより枷が外れたのである。

信次『緒方あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！てめぇだけは絶対ゆるさねぇ！！！』

緒方『ほざいてろ小僧！！』

緒方の剣が信次に襲い掛かる。ルーシャの流派と同じだが熟練度が桁違いであるが信次はそれを右腕一本で防いだ。

緒方『なに！？』

信次『がああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

雄叫びで緒方を吹き飛ばす。そして、信次の体が完全に竜になった。

緒方『そうか！！貴様が竜人の生き残りか！！これで我々は！！』

緒方の体に鉄砕牙が突き刺さった。

緒方『ば、ばかな・・・俺がこいつらごときに・・・』

完全に絶命したが信次は攻撃をやめない。粒子に成りつつある体を殴りつけている。

准『信次よせ！！そいつはもう死んでる！！』

信次が振り返りその眼を見て准は直感的に思った。

『逃げろ！！』

と。

信次の背後に闇のソルジャーが数十人いる。

ソルジャー『死ね!!』

だが、死んだのは彼らのほうだった。今の信次は怒りによって我を忘れている。かなり危険だ。その信次に襲い掛かれば結果は火を見るより明らかである。

信次は殺したソルジャーたちを殴り続けた。彼の周りは血で染まっている。

玖音『准!!』

准『玖音!!信次が!!』

ケイオス『見ればわかるよ。怒りで我を忘れているね』

玖音『准、俺とケイオスであいつの動きをとめる。その瞬間に鬼道で動きを完全に封じろ!』

准『わかった!!』

「それから1時間して信次くんは止められました」

「・・・・・・・・」

全員が言葉を失っていた。

「今のあの時の信次は完全に我を忘れていたけど今の信次は違う。完全に竜の力をコントロールしてるから」

「そのどうなったの？」

楯無が聞く。

「信次くんはそれから3日後に目を覚ましました」

信次は太陽の光で目が覚めた。起きると隣に玖音が座っていた。

玖音『・・・信次。お前、自分が何をしたか覚えているか？』

信次『オレは・・・』

玖音『お前がやったことは闇と同じことだ・・・。確かに緒方は殺さなければならない存在だった。だが、お前は怒りで我を忘れ、その怒りの感情でさらに人を殺した・・・』

信次『・・・・・』

玖音『人を殺すのはやってはならないことだ。だが、世界のバランスやその他のことを考えれば殺すしかない奴らもいる・・・。それが世界の理なのかも知れない。でも、お前は他の奴らも殺した。この世界で人を殺すってことはな、そいつの過去も未来も何もかも奪

うってことだ』

信次『!?』

玖音『信次・・・オレ達は神じゃない。救える命もあれば救えない命もある。だから、修業するんだ。その救えない命を救えるために、大事な何かを護れるようになるためにな』

信次『・・・わかんねぇ・・・そんなのわかんねぇよ!!』

信次は晃憲寺を飛び出してしまった。

玖音『言い過ぎたかな・・・』

ケイオス『そうでもないと思うよ。信次はちゃんと帰ってくる・・・』

それから信次は3日間アパートの部屋に篭ってしまっていた。

信次『・・・・・・』

何かをする気力すら湧かない。このまま朽ち果ててもいいと思っていた時

???『信次!初めて会っ岬で待ってるよ』

死んだはずのルーシャの声が聞こえた。

信次『え?』

信次は起き上がり周りを見る。閉めたはずのドアが開いていた。信次は部屋を飛び出しあの岬へ走った。

時刻は夕暮れ。最初にルーシャと出会った時と同じ時間帯。岬の先でルーシャが待っていた。

信次『ルーシャ・・・』

ルーシャ『神さまにお願いして少しだけ時間もらったの』

信次『何で・・・』

ルーシャ『だって、今の信次悲しそうなんだもん。だから。あのね、生き物ってなにがなんでも生きようとするの。それは人間も同じ。みんな、明日に向かって生きていくの』

信次『明日・・・』

ルーシャ『そう明日。私ね明日をもらったの。未来のために・・・。だから、信次も生きなきゃいけないの』

そう言うとルーシャは信次を抱きしめた。ちゃんと実体がある。

ルーシャ『大丈夫。私はいつも信次のそばにいるから・・・。忘れないで』

そして、ルーシャ緋色の粒子となって消えた。

信次の眼から涙が溢れた。

信次『・・・明日、か』

その顔は何かを決意した顔であった。

晃憲寺に戻ると玖音とケイオスが待っていた。

玖音『まったく。3日もサボりやがって・・・』

ケイオス『でも、いいと顔になったね』

そして、玖音が信次に叢雲牙を渡したのであった。

「いい話しですね・・・」

真耶は泣いていた。

「不思議なこともあるのね・・・」

「さっきの事象はかなりあったらしいのよ。って言ってもめずらしいけどね」

と咲耶が説明した。

「で、その後どうなったんだ?」

「信次くんはかなり成長し十番隊の隊長に任命されました。でも、その1年後に師である2人と別れる事件がありました」

「何があったの?」

楯無が聞く。

「根源的破滅招来体と言う敵との戦いが起こりました。それが原因です」

第２０話　竜の神話　―破滅招来体編―

「根源的破滅招来体？それは一体なんですの？」

セシリアが聞く。

「世界の奥深くに根付く破滅の意思です」

「破滅の意思？あのイリスと同じなのか？」

「いえ。あれはもっと別な存在なんです。イリスは太古の存在。根源的破滅招来体は言ってみれば世界の怨み、憎しみといった世界の負のエネルギーなんです」

「負のエネルギー？」

鈴が首を傾げる。

「この世界にもあるわよ。って言うかだから、イスファルやサージェスが現れたんでしょ？」

咲耶が言う。

「ええ・・・。この世界の負のエネルギーは比べものにならないほどに増大しています」

「それはＩＳが開発されたからか？」

一夏の質問に天使、アルティ、咲耶は黙って頷いた。

「その話しは信次くんが起きてからにしましょう。その当時彼は根源的破滅招来体の討伐とある人物から“龍天月破”を教わっていました」

「龍天月破って信次の得意技でしょ？どんな人が教えたの？」

「・・・柳瀬　神威。その実力は如月玖音と互角と言われた剣士でした」

その時、天使の顔が一瞬曇った。

信次は晃憲寺で元十三隊四番隊隊長　柳瀬神威から“龍天月破”を教わっていた。

信次『く・・・フヌヌヌ・・・』

神威『もっと集中しろ。自分の中の魔力と外の魔力をうまく合わせるだ！』

信次は叢雲牙に自分の魔力を与え、それに外の魔力を合わせていた。この技術はかなり高度なものである。外と中の魔力は確かに合わせる事は可能だがそれは内の魔力に比べて外の魔力の使っている比率が圧倒的に少ないからである。しかし、今信次がやっている技は内

の魔力6に対して外の魔力4といった割合で行うため容易にはできない。実際のところ信次はこの修業だけで約一月ほど費やしている。

ドガーーーン!!

信次の周りの魔力が暴発した。

神威『・・・才能ないな。それでもあの桔梗の子か?今日はここまで!明日あたりにできないと地獄いきな』

神威はそう言って
立ち去った。これで修行は終わりではない。

???『信にぃ!!』

と言って走ってきたのは8歳の子供。髪の色は蒼。

信次『大護・・・。今日は何するんだ?』

信次の言葉に大護は笑顔だった。
この子供　柳瀬大護は神威の1人息子である。幼いがその魔力の量は常人の2，3倍はある。今からその子供と遊ぶのである。

「あの子と遊ぶのは並大抵じゃなかったのよ・・・」

咲耶が言った。

「なんで？」

鈴が聞く。

「あの子、大護と遊ぶのは修行より厳しいの・・・。あるときは山で熊に追われたり、またあるときは怪鳥に追われたり・・・生きた心地がしなかったわよ」

当時遊んだ経験のある咲耶が語る。その恐ろしい経験は今でもトラウマとして残っている。

「彼、大護はのちに悲劇的な道を歩むことになります。それはいいとして、十三隊は関東地方に出現した根源的破滅招来体の撃破を主な任務としてこなしていきました。そのおかげで信次くん達はかなりの実戦経験を積みました」

「で、その根源的破滅招来体との対決が信次たちの今の力の元になったってわけ」

咲耶が言う。場所が晃憲寺に代わった。

玖音『さてと・・・やつらはこの地球を破壊するらしいな』

ケイオス『うん。やつらは僕たちのことをウィルスだって言ってたからね・・・』

玖音『ウィルスねぇ・・・・確かに見方によっちゃぁそうかもしれねぇが・・・・一方的に向こうから来てる以上ウィルスは向こうだろ』

根源的破滅招来体。その真の目的は地球上に存在する人類の抹殺であった。

玖音『信次。神威？』

信次『何かどっか行くって。たぶん破滅招来体対策だと思う』

玖音『さてと・・・。あとは奴らの大元を断つだけだ』

「それから一週間後に根源的破滅招来体との決戦が始まったのです」

世界中の空が破滅魔虫ゾビシに覆われた。

玖音『奴らは地球を窒息死させるつもりか！？』

晃憲寺でゾビシを退治しているがいっこうに数が減らない。

ケイオス『さすがにきりがない！！』

信次、准、嵐も覚えたての空中戦でゾビシを倒してる。

５人が着地すると

地震が襲った。

准『地震!?』
嵐『あれ!?』
嵐が指を指す。森の地面が盛り上がりそこから怪獣が現れた。

「怪獣!?」
一夏が驚く。
「これが破滅なの?」
楯無が聞く。
「あれは世界に魔法をもたらした火の精霊に仕える使者ソドム。彼は十三隊に加勢しにきたのです」
天使が説明するとソドムがゾビシに攻撃を始めた。
「てか何でその精霊の使者と知り合いのようなの?」
鈴が聞く。
「それは後ほど信次くんから聞いてください」
「つまり地球そのものが破滅を許さなかったって、こと」
アルティが言った。

玖音『オメーラ・・・蝿退治だ!!』
その掛け声とともに5人は空へ。そして、ソドムや精霊の使者たちとともにゾビシを消滅させていく。
世界中のゾビシが消滅を終えた時、晃憲寺上空に天使?出現した。

信次『天使?』
ケイオス『違う!!信次避けて!!!!』
信次『え?』
天使から放たれた衝撃波が信次に直撃した。
信次『うわああ!?』
玖音『あいつは?』
ケイオス『破滅天使ゾグ・・・・』
玖音『奴らは神にでもなるつもりか?』
ゾグ『混沌よ・・・なぜ、人に加担する?よもや忘れたのか?われらの役目を』
ケイオス『確かに僕は同じかもしれない・・・でも・・・・』
玖音『ゴタゴタうるせぇ!!!誰がなんと言おうがケイオスは人間だ!!てめぇらと同じじゃねぇ!!!』
ゾグ『下等な生物が・・・死ね!!』
ゾグの放った光の一撃が玖音の心臓を貫いた。
ケイオス『玖音!?』
地面に倒れた玖音。
ゾグ『しょせん下等な存在、いずれ滅びる愚かな存在だ・・・』
信次が起き上がり。
信次『確かに人間は愚かかもシレねぇ・・・でもなぁ!オレたちはわかりあえた!!』
准『お前の!!』
嵐『好きにはさせない!!』
3人の言葉にケイオスはうなずき。構えた。
ゾグ『それがお前の答えか?』
ケイオス『僕は戦う!!1人の人間として!!』
ゾグ『愚かな・・・では、1人残らず滅ぼしてくれよう!!!』
ゾグの力は圧倒的だった。4人の攻撃を衣とも簡単に防ぎ、そして、

攻撃。見えない衝撃波を辛うじて回避していたがそれにも限界がある。嵐は右膝を撃たれ、准は山に激突しダウン。信次とケイオスだけになってしまった。
信次『だりゃあああああああ!!』
信次は叢雲牙に魔力を込め突撃する。
信次（一か八かだ!!）
刀に黒い波動が形成される。
信次『龍　天　月破!!』
斬戟がゾグに向かって放たれた。
ゾグ『!?』
だが、ゾグの力で弾き消された。
ゾグ『・・・・貴様。まさか、リュージ・レクサリーナの血を?』
信次『顔も見たことねぇ親父なんて知るか!!』
ゾグ『よもやまだ存在いたとはな・・・。竜の力を持つ者が。貴様をここで生かしてはおけぬ!!』
ケイオス『余所見?もらった!!神槍脚!!』
ケイオスの必殺の一撃が当たるが
ゾグ『消えろ!』
2人に衝撃波を食らわせる。
そのとき、

??『不知火十天炎技　炎炎羽!!』

炎の羽がゾグに直撃した。
ゾグ『何!?』
2人は放たれた所を見た。そこには

玖音『如月　玖音!!推参!!』
九尾の力を纏い半人半神獣となった玖音の姿があった。
信次『玖音!?』

玖音『信次！よく見とけよ！！』

玖音とゾグの壮絶な一騎打ちが始まった。そして
ゾグ『消し去ってくれよう！！』
ゾグが膨大な魔力を圧縮し始めた。それが地上に当たったらそこら
遍一体は完全に消滅するほどのモノであった。
それに対して玖音も２つの槍を合わせ自身の最強の槍と化した神槍
“獅子狗白”を構える。
玖音『水無月一閃槍術　終式・・・・・』

ゾグ『消え去れ！！』

玖音『神　雷ぃぃぃぃ！！！』

紅蓮の魔力と白い魔力が激突した。徐々に白い魔力が押し始める。
ゾグ『バカな！！そんなことは・・・バカなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
！！！！！』
白い魔力がゾグを包み込み消滅した。
玖音『終わったか・・・』
ケイオス『うん・・・これで終わり』
信次『ケイオス！！体が！！』
ケイオスの体が白い粒子になり始めていた。
ケイオス『僕は長く生き過ぎたから。ずっとこの瞬間を待っていた
のかな・・・』
玖音『お別れか・・・イロイロ世話になったな』
ケイオス『僕は１万年前から人間を見てきたけど玖音たちに会えた
ことが１番の思い出。破滅招来体である僕を仲間だって言ってくれ
たからね。
ありがとう・・・・・・。
さよなら・・・・』

ケイオスの体は白い粒子となって消えた。それは空へ上る雪にも、天使の羽にも見えた。

「これで終わり？」
「いえ。そこにあの男が現れたのです」

？？？『ところがぎっちょん！！！』
突然、大刀“キリバチ”が４人を襲った。
玖音『アリー・アル・サージェス！！貴様なぜここに！！』
サージェス『俺は赤蜘蛛の棟梁！！ここで十三隊をつぶすんだよ！！』

玖音とサージェスの一騎打ちが始まった。玖音は先の戦闘ですでにボロボロ。
玖音『お前がこの世界の闇で嵐の闇なら・・・オレはそれを断ち切る！！』
玖音はキリバチの一撃食らい瀕死の状態。それでも最後の力を振り絞る。
サージェス『死ねや！！』
玖音『水無月一閃槍術　神　雷ぃぃぃぃ！！！』

玖音の最後の一撃がサージェスを消し去った。

そして、倒れ、体が紅い粒子になり始めた。
玖音『嵐・・・お前に十三隊を託す・・・信次、准、凌・・・・嵐を頼む・・・お前らと会えてよかった・・・・じゃあ・・な・・・・』
そして、如月　玖音は消えたのであった。

「そして、新しい十三隊が組織されることになりました。そのなかで信次くんと咲耶さんが出会ったのです」

第２０話　竜の神話　―姫事件編―

「ああ～あの事件かぁ～懐かしい」
咲耶が呟いた。
「はい。咲耶さんが初めて信次くんと会った事件です」
天使が言った。
「あんたたちが会った事件？」
「そう。ゾグとの戦いから１年くらいたった時かな？」
「２人って、最初はどんな関係だったんだ？」
一夏が聞く。
「・・・敵同士。しかもあの時私はかなりろくでなしだったしね」
「ろくでなしとは一体・・・」
「・・・人を殺すのも厭わない。サージェス並の傭兵だったしね」
それを聞いた９人が冗談だと思った。
「では、ゾグとの戦いから１年後。信次くんと准くんが和歌山県の風華学園へ向かいました。そこでは“姫”と呼ばれる者たちとそれに介入する者たちとの戦いが始まったので」

景色が信次と准が船で風華学園へ向かっていた。
信次『まったく・・・ジジイは何考えてんだ？今の十三隊は宮木家の新入り以外に人数がいないんだぞ』
准『しょうがないだろ。お頭が命令じゃ』
信次『つーかジジイの知り合いだろ？依頼人はジジイかババアじゃ

ないか？やる気が失せる』
信次はここ最近言動が玖音に似てきていた。

２人は風華学園の理事長室に呼ばれ待っていた。
准『普通の部屋だな・・・罠も何もないなんて・・・』
信次『確か理事長は風華真白だっけ？どんな奴なんだ？』
准『風華学園は俺たちや京都守護職と違い“表”の世界にかなり影響力を持っているらしい』
信次『なんで？』
准『俺たち十三隊は幕末に組織された組織だろ。で、初代の十三隊の隊長たちは裏の仕事、暗殺とかで今の地位を確立した』
信次『それに伴い裏の仕事をする違法魔導組織が増え。それを抑制、潰すといったことで存在してきたってことか』
准『逆に風華学園は平安時代から続く名家“風華家”が設立した学園だ。しかも風華家は公家のなかでもかなり上級職・・・。しかも京都守護職の設立も促したらしい』
信次『それは天皇とかにも言えるほどのモノなのか？』
准『たぶんな。じゃなければ無理だろ』
准はそう言いながらタバコを取り出し火をつける。
？？？『ご明答です。流石は武田龍剣殿が送られた十三隊の隊長ですね』
扉が開き入って来たのは車椅子に座っている幼い少女だった。
真白『始めまして。風華学園理事長の風華真白と言います』
二三『メイドの二三と申します』
部屋に入って来た２人が信次たちと反対側に移動する。
信次『ババアと予測していたがまさか少女とはな・・・。オレは十三隊十番隊隊長　宮田　信次』
准『同じく八番隊隊長　姫矢　准。依頼の内容はこちらで聞けと聞いている。仕事の内容は？』

真白『仕事の内容は簡単です。この学園をオーファンから守ることと“姫”たちの護衛です。護衛と言っても簡単なモノですが』
信次『オーファン・・・。確かこの地方に伝わる妖怪だったな。姫と言うのは？』
真白『姫とは高次物質化能力を持つ者たちの総称です。現在この学園に１０人います』
准『・・・その者たちの護衛、いや監視をしろと』
真白『ハイ。我々は今２つの勢力から圧力を受けています』
信次『圧力？何処から？』
真白『１つは
一番地と呼ばれる政府の裏研究機関です』
准『確か奴らは魔法の研究を中心なはずでは？』
真白『そうですが。姫の能力も魔法に関係があると言うので・・・』
信次『で、もう１つは？』
真白『お二人も聞いたことはあるはずです。シアーズ財団を』
信次『おいおい。シアーズって世界有数のざいだんじゃんねぇか！？』
准『各政界にもかなりの権限やらイロイロ持ってる連中か・・・』
信次『じゃあ。その姫ってのは何人いるんだ？』
真白『二三さんを合わせ１０人います』
信次『・・・姫か。何か誓約やらあるのか？』
真白『それは・・・。彼女たちにはチャイルドという契約獣がいます。それを倒されれば。彼女たちの大切なモノが失われます』
信次『大切なモノ？命かそれとも“大切な人”か・・・。それは秘密ってことか』
真白『これ以上は・・・』
信次『わかった。それ以上は聞かねーよ』

「それから彼らは鴇羽　舞、久賀　夏稀、杉宮　命、須藤　ミカ、杉浦　碧の5人の姫と知り合いました。そして・・・」
「動き出しんだよ。シアーズ財団と当時そこに雇われていた私がね」

信次『吸血鬼ねぇ～オーファンじゃないの？』
准『十中八九そうだろ？』
信次『で！なんでオレたちが森の捜索隊なんだよ！？』
2人は真白の頼みにより風華学園ないの森を捜索していた。

『キャアアアアア！！！！』

信次『悲鳴！？』
准『教会の方だ！』
2人は駆け出した。刀を抜刀している。
信次『こっちは学園祭でやられた姫がいるから残り9人！たぶん連中は』
准『残りを探している！』

？？？『ここからは行かせないよ！』

不意に女の声とともに紅い魔力弾が降ってきた。
信次・准『！？』
？？？『ここからは行かせないよ！！って言ったの』

茶髪の髪を雑にまとめ、湯帷子を来ている2人と同い年ぐらいの女性だった。
信次『何者だ?』
咲耶『始めまして。十頭族“虎桃族”頭領の藤堂　咲耶』
咲耶はそう言いながら炎刀“緋燕”を構える。
信次『准・・・』
准『わかってる・・・』
2人はいきなり左右に別れ走り出した。そして、信次が咲耶に切り掛かる。

ガキンッ!!

咲耶『へぇ〜やるじゃん♪久しぶりに楽しめそう!!』
咲耶は無邪気に緋燕を乱発する。それを信次は舞うように避け、咲耶との間合いを詰める。
信次『空風流天龍剣　雲斬り!』
叢雲牙を回転させ咲耶を斬ったかのように思えたが
パシャ!!
咲耶が水のように消えた。
信次『水分身!?』
咲耶『終わり!!』
頭上から緋燕を乱射する。がそこに信次の姿はなかった。
咲耶『何処!?』
信次『上だよ・・・』
咲耶の上に信次が叢雲牙を上段に構えていた。
信次『空風流天龍剣　龍槌閃!!』
叢雲牙を振ったが

ガキンッ!!

咲耶が背中に背負っていた大刀で斬撃を防いだ。
両者ともに着地し
信次『断刀“首斬り包丁”・・・桃地斬無斬か』
咲耶『そうよ。私は先代の虎桃族の刀を全て持っている・・・』
信次『そうかい・・・』
咲耶『でも、今日はここまで。さっき呼ばれたから』
信次『シアーズ財団の傭兵か?お前は』
咲耶『そう。またね』
咲耶は飛んでいった。

咲耶の隠れ家。
アリッサ『そう。向こうにも貴女と同じやつが・・・』
咲耶の依頼主のシアーズ財団の1人娘アリッサ・シアーズ。
咲耶『そう。かなり厄介なのが2人・・・』
ミユ『勝てますか?その2人に?』
アリッサの侍女ミユが聞く。
咲耶『たぶん』
司祭『たぶんとはなんだたぶんとは!?コチラがいくら払っていると思ってる!?』
咲耶『前金2000万円にプラスするんでしょ?あんたみたいに保身に走る男のことなんてしるわけがないじゃない』
司祭『貴様~ならここで』
司祭が銃を抜いたがその腕はすでに斬られていた。
司祭『ギィヤヤヤヤヤヤ!!う、腕がーーー!!』
咲耶は二本で一本の刀　雷刀“牙”で司祭の腕を斬ったのだ。
咲耶『・・・でも、予想外かな?まさか、首斬り包丁にヒビが入るなんて・・・』
咲耶は立てかけてある首斬り包丁を見て言う。
アリッサ『司祭は貴女に任せるわ。あと、その2名を倒しなさい』

咲耶『・・・リョーカイ』
そう言うと咲耶は断刀“首斬り包丁”を司祭に刺した。

その光景に全員が目をつぶる。
「だから、言ったでしょ?ろくでなしだったって」
咲耶はケロッと言ってるが彼女がやっていたことは殺人だ。しかも1人2人とか言う問題ではない。
「で、それから1ヶ月後に文化祭があったの。それが最初の戦いの狼煙になった・・・」

風華学園の文化祭。
様々な企業やらなんやらが集まった盛大なモノになった。その夜。
信次と准は屋台を回っていた。
信次『なかなか!』
准『確かにここんところ張り詰めたまんまだったからな・・・』
2人は祭を楽しんでいた。あれから目立った襲撃はない。
その時

ドガーーーーーン!!

天空より閃光が落ちた。
信次『なんだぁ!?』

准『橋が！！』
辺りが騒然となるなか2人は閃光が落ちた地点を見た。そこには橋があったが先の閃光で完全に消滅していた。
信次『・・・シアーズか』
准『ああ。まさか空から攻撃するとは・・・』

「おいおい・・・何があったんだ？」
一夏が聞く。
「こっちで言えば衛星兵器。しかも、姫の高次物質化能力を使ったモノ」
咲耶が淡々と説明する。
「・・・シアーズ財団の狙いは何だったんだ？」
千冬が聞く。
「姫の力を手に入れて世界を支配すること。でも、それは不可能だったの」
「なんで？」
「信次と准がいたから。それにシアーズ財団の幹部たちは姫の力を侮っていたしね」

信次『おいおい・・・シアーズの連中はＳＳ（私設武装部隊）も持ってるのか』
風華学園にはすでに自衛隊と偽装して学園を占拠したシアーズ財団

の私設武装部隊がうようよいる。私設部隊はなぜか女子生徒たちを検査していた。
准『・・・なるほど、血液を調べれば解るってことか』
信次『どうする?』
准『とりあえず真白のところに行く』
2人はいざという時のための場所に行った。そこは学園の地下にある遺跡のような場所だった。
信次『古代文字?』
壁に刻まれてある文字を見て言う。それは紛れもなく古代人が使っていた文字だった。
准『壁画もあるな・・・』
准が見つけた壁画には赤、蒼、紫の翼を持った“天使”のような戦士が戦っている壁画だった。
しばらく進むと二三が迎えてくれた。
二三『もう、皆さんが待っています』
案内された広間には真白を筆頭に鴇羽舞を初めとする“姫”たち、6人が揃っていた。
信次『戦力はこれだけか?』
真白『こちらには私設部隊はありませんから。でも、現状では最強の戦力ですよ』
信次『確かにな・・・。作戦内容は?』

「学園側の作戦はシンプルなものだったの。火力の大きいチャイルドを持つ姫は沖合いにある艦4隻を、他の姫と信次と准は学園内の私設部隊をそれぞれ各個撃破。たったそれだけの作戦だったのにシアーズは負けることになったの」
「咲耶はどうしたの?」

鈴が聞く。
「信次と准を止めるように言われた。そこで、戦いが始まったのよ・・・・」

学園奪還作戦が始まった。

タイムリミットはアリッサ・シアーズの使役するチャイルド“アルテミス”が学園上空に到達するまでの約４時間。それまでに私設部隊の壊滅（撤退ｏｒ無力化）が今回の任務である。
作戦は繭川　千草の高次物質化能力の力で学園内に結界を張り、生徒から隠す。そして、それに応じて各個撃破するというものだった。
信次は准と共に部隊の兵を無力化していく。
半数の敵を無力化したところで２人は二手に別れた。信次は学園へ、准は海域で応戦している姫たちの援護へ向かった。
信次『ひゃーく！！』
１００人目の敵を倒しおえた信次は周りを見た。シアーズ財団の私設武装部隊の兵隊たちがの伸されている。
？？？『へぇ～・・・・なかなかやるんじゃない？十番隊隊長さん』
茂みから咲耶が姿を現した。背中には断刀“首斬り包丁”と削刀“鮫肌”を背負い、腰には雷刀“牙”、嵐刀“青嵐”、炎刀“緋燕”、爆刀“轟怨”の６本を携えている。
信次『・・・・四季崎の作った変体刀たちか・・・・巻物には千刀“剣”か？』
咲耶『・・・・・そんなことより始めましょう？本当の戦いを・・・・』
咲耶が雷刀“牙”を抜き構える。信次は相変わらず構えない型　空

風天龍剣　零之型。
咲耶『はああ！！！』
いきなり間合いを詰め斬りかかる。信次は冷静に対応していく。その中で信次は周りをチラッと見る。輪周りの人間は気絶させたはずなのに粒子となって消えていく。
信次『シアーズの連中は命を何だと思ってやがる！？』
咲耶『私が知るはずもないでしょ！？今の私はただの傭兵・・・・
虎桃属　最後の頭領　ただそれだけよ！！』
鮫肌を抜き信次の魔力を削る。そして距離を取り両手で印を結び始める。それは日本の魔法スタイルだ。
咲耶『水遁　水鮫突破！！！』
２匹の鮫が噴水の水から現れ信次に襲い掛かる。
信次『空風流天龍剣！！地摺り桜！！！』
超下段からの居合い抜き技。斬撃が鮫を斬る。だが、咲耶はそこまで甘くない。一気に間合いを詰め轟怨を振るう。
咲耶『死んじゃえ！！』
刀から流星のような炎の弾が信次を襲う。
信次『まだだ！！』
信次は叢雲牙を盾に炎弾を防ぐ。そして、そのまま咲耶に突っ込む。
咲耶『ぐう！？』
吹っ飛ばされた咲耶は後ろに飛び右手で首斬り包丁を構える。左手には巻物がある。
信次『なぜお前は人を殺す？』
咲耶『・・・・それしかできないからよ。あんたなんかに解るはずもないでしょ？政府から雇われている連中なんかに』
信次『オレたちは別に雇われているわけじゃない。オレたちはただそこにいるだけだ』
咲耶『そこにいるだけ？１０年前に鳴祭を殺したのに！？そんな連中が政府の正式な裏人？笑わせないで！！』
信次『鳴祭？誰だそれ？』

咲耶『私に千刀流を教えてくれた恩師よ。私の義理の姉でもあった・・・・』

信次『１０年前のことなんてオレは知らない。逆恨みか？』

咲耶『確かにそうかもね・・・今の私は復讐で動いてるかもしれない。でも、今の私はそれしかないの！！』

咲耶は巻物を開ける。そこから無数の刀が口寄せされた。

信次『千刀“剣”・・・だと？』

咲耶『言ったでしょ・・・・。私は虎桃族の忍び刀を全部持ってるって』

と言って近くの剣を取り構える。右手で首斬り包丁を構える。２人の周りには刀がひしめき合っている。

信次『空風流天龍剣　流水之型』

構えない信次だがそれなのに隙が見えない。

咲耶『千刀流　海燕！！』

一本の刀を投げ一気に間合いを詰める。その間に左手に2本の剣を抜き再び投げる。信次はそれらを制空圏で防ぐがそれを待っていたかのように咲耶が首斬り包丁で斬る。

信次『くっ！？』

咲耶は今度は空に跳ねられた剣をキャッチし投げ、斬る。これが千刀流の最大の武器相手との間合いを完全に支配する。これが千刀流の真髄である。

咲耶『もらった！！』

一瞬の隙を突き1本のつ剣が信次の左肩に突き刺さった。

信次『・・・・・・』

信次は無言で肩から刀を抜き取る。

咲耶『どうする？まだ続ける？その傷で』

信次『・・・片手あればお前は倒せる』

信次はとんでもないことを言った。残った右手だけで咲耶を倒すと。

咲耶『虎桃族なめてんの？』

殺意を剥き出しにする咲耶。

信次『お前の技は完全に見切った。次で仕舞いだ。子鬼ちゃん』
咲耶『子鬼ちゃん?じゃあ!!!死ね!!!!!!』
咲耶がもう突進してきた。これこぞが信次の狙いだった。
信次『これでお前は終わりだ!!』
右手だけの叢雲牙の刃を地面につけた。地摺り構え。
信次『空風流天龍剣　一刀之型　翔龍閃!!!』
超下段からの一撃が咲耶を襲ったが咲耶はそれを首斬り包丁で防いだ。
咲耶『終わりはあんたのほうだったわね!?』
しかし、信次の姿が見えない。
信次『空風流天龍剣　一刀之型　龍槌閃!!!』
今度は空からの大上段打ち。それが咲耶にヒットした。
信次『峰打ちだけどな・・・・・』
信次はそう言うとその場を立ち去った。
咲耶『負けちゃった・・・・・』

「信次ってかなり強かったんだ・・・・」
シャルロットが驚く。
「そうね、あの時点でもかなり強かった。で、その後は」
「彼らたちはアリッサたちを何とか追い込みましたが彼女たちはそう簡単には降参しませんでした」

何とか追い込んだ信次たち。
准『降参したらどうだ？』
アリッサ『あなたたち何か勘違いしてない？アルテミスは兵器じゃなくチャイルド。すなわち、生きているのよ！！！』
信次『まさか！？』
空が金色に染まり始めた。衛星攻撃が開始される前触れである。
彼らは読み違えていた。アルテミスが一定の速度で動いていること。だが実際は違った。
信次『准！！なんとかなんねぇにか！？』
准『無理だ！あれだけの魔力は相殺できねぇ！！』
完全に絶体絶命。その時
神威『情けないな・・・・・』
二本の刀を持った柳瀬神威が姿を表した。
信次『神威さん！？』
神威は無言で二本の刀に魔力を込める。信次はその二本の刀に見覚えが合った。
信次『空刀“虚空”、十柄剣・・・・』
二本とも初代草鹿練空が鍛え上げた名刀である。
准『いくらなんでも大気圏にいる敵を討つなんて無理だ！！』
神威『・・・黙って見てろ・・・！』
虚空と十柄剣に魔力が込められていく。そして、アルテミスから光の矢が放たれた。
神威『神御呂（かみごろし）死！！』
紅と黒の一撃が光の矢さえも斬り裂き、アルテミスに直撃した。
アリッサ『あああああああああああ！！！』
自身のチャイルドを消されアリッサの“大切な人”であった父がこの世から消えた・・・・。
信次『大気圏外の敵を討つなんてありえるのかよ・・・・！』
そんな事例は聞いたことがない。あるとしても古代の禁忌魔法もしくは初代十三隊の壱番隊隊長の黒羽　戦ぐらいだろう。それを柳瀬

神威はやったのだ。
神威『これがおまえらにできる最後のコトだ・・・・』
神威はそう言うとその場から立ち去った。

その5日後。
風花学園の理事長室。
真白『おかげで危機を乗り越えることができました』
信次『まあ。仕事だからな。これからは？』
真白『・・・・これかはオーファンは出ません。代わりに戦が始まります』
准『戦？』
真白『・・・・最後の“姫”を決める戦が。お願いです！最悪の結末だけはなんとしてでも避けさしてください！！』
真白が頭を下げた。

「どういう意味なのですか？」
セシリアが咲耶に問う。
「元々“姫”って言うのはある意味絶対的な存在だったのよ」
「絶対的な存在？」
「“姫”の力は高次物質化能力・・・・。これはどんな魔法にもできない机上の空論的な力なの」
「何でだ？」
一夏が問う。
「そうか！何もない所から存在させるから！！」

シャルロットが答えにたどり着く。
「なるほど。その力を自由に使うことができれば正に無敵・・・・。ということか」
千冬が言う。
「そう。シアーズもこれから介入してくる“一番地”もその力が狙いだったの」
「そして、戦いは始まりました・・・・。最初はみんなが戦を嫌っていましたが“一番地”とある使者により戦いが激化しました」
「ちょっと聞いてもいい？“姫”はチャイルドが死ぬと“大切なモノ”がなくなるって言ってたわよね？そのモノってなんなの？」
鈴が訊く。
「それはね。自分の“命”じゃなくて“自分の大切な人の命”だったの。戦いは憎しみから始まったの」

シアーズの襲撃事件から3週間後。とうとう最悪の事態が起ころうとしていた。“姫”たちのほとんどがいないのだ。緊急の事態のため信次と准はいない7人を探しに森に入った。
だが、森には幻影の霧がかけられていて思うように先に進めない。
信次『コイツはシスターのか！！准！！索敵できねぇのか！？』
准『ほかの6人はこの先で戦ってやがる！！！しかも鴇羽の弟もいる！！』
信次『まずいぞ・・・・。タクミが死んだら鴇羽がカグツチを暴走させる！！』
“姫”の1人である鴇羽舞には1人の弟がいた。彼は心臓が悪く今度海外で手術を受ける予定になっている。
？？？『シスターは山の絶壁にいたよ』

２人の前に咲耶が姿を現した。
信次『またやるのか!?』
信次は叢雲牙を抜き構える。
咲耶『怪我してるあんたとやってもつまらない。どうする?シスターには“一番地”の男がいたよ』
准『俺がシスターのとこに行く!信次は鴇羽たちを頼む!』
信次『分かった!!』
２人はそれぞれ向かった。咲耶は黙って空を見上げた。空に怪鳥のチャイルドが見えた。
咲耶『私も甘くなったかな?』
断刀“首斬り包丁”を抜き空へ飛んだ。
信次が戦いの場に着く直前。

ゴアアアア!!!

巨大な炎が森の一角を焼き尽くした。カグツチの炎だ。
信次『まさか・・・・!』
信次が向かった先ではタクミを思っていた“姫”朝倉　千秋のチャイルドが舞の妹のような存在のミコトの一撃で倒されタクミが消えていったところだった。
信次『遅かったか!!』
舞はただ無表情でミコトを見つめ
舞『なんでタクミを殺したの?ミコト・・・・』
信次『落ち着け鴇羽!!』
だが舞は信次の言葉が耳に入っていない。
舞『ミコトーーーーーーーーー!!!!!!!!』
怒りという叫び声とともにカグツチが炎弾を撒き散らした。ミコトはそれをよけ応戦する。自我無いようだ。
信次『お前ら!!やめろ!!』

信次はカグツチの炎を避けながらミコトの長刀“弥勒”の斬撃を防ぎ戦う。もはや神業の領域だ。
だが、2人相手では信次でも分が悪い。
ミコト『はあああああああ!!!!』
弥勒の突きが信次の肩を貫いた。まだ傷が完全に塞がってない状況だ。
信次『ぐうう!?』
だが、
准『縛導ノ九十九“禁”!!』
間一髪准が自身の最強の捕縛術で2人を捕らえ押さえつけた。

「これが“姫”同士の戦いよ」
目の前の光景に9人は黙ったままだった。
「・・・・イリスやゾグの戦いとは比べ物にならないが凄まじいな・・・・」
ラウラが声を出した。
「それから、しばらくして敵の黒幕が姿を現しました」
「黒幕?」
“黒耀の君”と呼ばれる王が」

信次の怪我も完全に癒え2人は理事長室に向かった。が、中には誰もいなかった。

信次『おかしくねぇか？この事態に』
准『ああ』
結局あの戦いから脱落した者はいないが学園内に大きな傷が残った。
そんな状況で理事長である風花真白が消えたのだ。
咲耶『彼女なら黒耀宮にいると思うよ』
咲耶が立っていた。
信次『黒耀宮？どこだそこ？』
咲耶『この学園の地下に強力な龍脈が存在しているの。黒耀宮はそこからあふれ出る魔力を制御する神殿』
准『何でお前がそんなこと知ってんだ？』
咲耶『一番地の連中脅して聞いたの。もちろん殺してないわよ』
信次『その話が本当だとして一番地は何が目的なんだ？』
咲耶『・・・やつらは黒耀ノ君の力を我が物にし世界を支配しようとしてるの。１０年前に存在したマダラのようにね』
准『マダラっていやあ１０年前の事件の首謀者だろ？何の関係があるんだ？』
咲耶『マダラは元は一番地の幹部だったの。でも一向に進まない成果に対して焦りを感じ単独で１０年前の事件を引き起こした』
信次『だが、当時の十三隊によって奴は消滅した』
咲耶『そう。だから、風花はあんたたちに依頼を頼んだ。マダラに匹敵する力を持つ者たちにね』
准『で、じゃあその黒耀宮にはどう行くんだ？』
咲耶『この部屋に隠し通路がある。そこから行ける』
と咲耶は室内をくまなく探しまじめる。
信次『なんでオレたちに協力する？十三隊は嫌いじゃなかったのか？』
咲耶『気まぐれかな？あった！』
咲耶がスイッチを押すと壁に飾ってあった壁画が動き隠し通路が現れた。
信次『いくぞ！！』

3人が進むと広い広間のような場所にたどり着いた。
？？？『ほお。ここに来る人間がいるとは。1人は人間ではないが・・・』
甲冑に身を包んだ男がいた。後ろには真白と二三が捕らえられている。
黒耀『わが名は黒耀。何しに来た？』
信次『悲しい運命って奴をぶっ壊しにきた』
黒耀『運命？“姫”は余が生み出した宝具より顕現したもの。それは余のモノ。すなわち、10人の姫より最も強い者を選びその者と余が契約し世界を支配する』
咲耶『考えはマダラと同じってわけね・・・』
黒耀の考えは10年前に事件を引き起こした狂人うちはマダラに似た考えを持っている。
准『ここまま。はい、そうですかってわけにかねぇな！』
准の一声で3人は抜刀する。
黒耀『ふん。1人ずつ相手をしてやろう！』
黒耀から放たれた黒い魔力が准と咲耶を取り込んだ。
信次『准！？藤堂！？』
2人は銀色の繭に閉じ込められた。
准『こっちは大丈夫ってわけにもいかないらしい・・・』
咲耶『変な甲冑が来たし。そっちがなんとかして黒耀を倒して（時間稼ぎ）！！』
黒耀が大剣を抜いた。
信次『大剣“ブルートザオガー（吸血鬼）”』
黒耀『よく知っているな。では始めよう・・・！』
黒耀が踊りかかる。信次はブルートザオガーを防ぐが黒耀が剣に魔力を込めた瞬間信次の皮膚を切り裂いた。
信次『！？それが能力か・・・』

信次は後ろに飛び距離をとる。
吸血鬼の名を持つ大剣“ブルートザオガー”。それは名の通り相手の血を吸う妖刀である。
黒耀『そうだ。続けよう！！』
信次は黒耀の攻撃をコンマ数秒の単位で返す。それはほとんど神業の領域だった。
黒耀『余の攻撃に対してここまで対抗するとはやるではないか！！』
信次『うるせぇ！！』
戦局は信次の防戦の一方。なかなか反撃できない。だが、信次は距離をとり構えた。空風流天龍剣　壱ノ型　通称“龍牙”。一撃必殺の構えだ。
黒耀『もうおしまいにするのか？それもよかろう・・・・』
黒耀も一撃必殺の構えを取る。
勝負は一瞬でついた。
信次『空風流天龍剣　奥義　真地正貫突き！！！』
それは信次が始めて玖音に一撃を加えられた技だった。信次の突きは黒耀の心臓を突き破った。
黒耀『バカな・・・・』
黒耀は消滅した。

その翌日。
信次と准は理事長室で真白と最後の話しをしていた。
真白『おかげさまで助かりました。黒耀様を消すことができました』
信次『別に仕事だからな。で、“姫”たち能力は完全に消えたのか？』
真白『ええ』
信次『あんたも今日でいなくなるんだろ？初代十三隊五番隊隊長

紅翼』
真白『気づいていたんですか？』
信次『なんとなくな。あんたはずっとこの世に残っていたんだろ。黒耀えお倒すために』
真白『はい。でもやっとそれも終わりました。本当にありがとうございます。さよなら。新たな世代よ・・・・』
真白はそう言うと体が白くなり粒子となって消えた。最後は笑顔だった。
准『帰るか・・・・』

校門では咲耶が待っていた。
信次『お前はどうするんだ？』
咲耶『働き扶持なくなったからあんたたちについていく』
信次・准『勝手にしろ』
3人は風花学園うを後にした。

「これが私と信次の出会いってわけ」
「信次ってかなり強かったんだな」
一夏が納得している。
「まあね。でもまた強くなったのよ・・・・。ある戦争で」
アルティが口を開いた。
「戦争？」
鈴が聞く。
「そう。大陸の魔法国家カルナヴァでは戦争が勃発したの“魔女戦

争”と呼ばれる戦争がね」
「私たち3人はその戦争に介入することになったのよ」
「そこでエンゲージという力を手に入れたのか？」
千冬の言葉にアルティと咲耶は黙って頷いた。

第２０話　竜の神話　―姫事件編―（後書き）

魔法国家カナルヴァに向かった信次、准、咲耶の３人はそこで数奇な運命と出会う。それは戦争を収束させるものなのか？それとも・・・

次回　竜の神話　―魔女戦争編　前編―

神話に存在した戦士が目覚める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3004q/

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉 ～竜の力の持ち主～

2011年11月8日02時11分発行